

《シンポジウム》

## 「奈良の将来」を考える

---

### 基調講演：「観光」から見た「奈良」（県）

J R 東海株式会社相談役 須 田 寛

ただいまご紹介をいただきました須田でございます。今日はお招きをいただきまして、ありがとうございます。約50分間お話を申し上げたいと思いますので、よろしく願い申し上げます。

今私は J R 東海に相談役として勤務いたしておりますけれども、J R 東海は、この奈良に大変いろいろお世話になっております。もう、会社創業以来ずっと観光キャンペーンをしております。京都で近鉄や J R との接続がございますので、それが東海道新幹線につながっているわけでございますので「今、奈良にいます」というキャッチフレーズで、ずっともう20年近く奈良の観光キャンペーンをやらせていただいております。特に今年は平城遷都の1300年記念祭がございまして、東海道新幹線から奈良方面においてになるお客様が4割近く増えたということで、大変ありがたいことでございます。私どもの会社の営業のために、非常に奈良ではいろいろご協力をいただいておりますので、この席を借りまして厚く御礼を申し上げたいと思います。同時にまた、これからいろいろリニアモーターカーの構想等もございまして、これも奈良市付近を通るということになっておりま

すから、またいろいろな意味でこれからお世話になる点が多々あるかと存じますけれども、どうかよろしくお願い申し上げます。

私のお話は、お手元に簡単なレジюмеをお配りしてございますので、これによって50分ほどお話を申し上げるわけでございます。「『観光』からみた『奈良』」と書いてございます。今日のこの議題にふさわしく、観光から見た奈良県の将来についてであります。ただ、奈良市だけに限定をいたしますと、少し範囲が狭くなりますことと、今は広域観光と申しまして、観光客が非常に広い範囲をおまわりになるような状況でございますので、奈良県全体ということでお話をしてみたいと考えております。

まず観光につきまして、往々にして誤解がありますので、観光というのは一体どういうものかということだけ、一言定義を申し上げて、それからお話に入りたいと思います。

観光という言葉は、もうどなたもご存知の言葉ではございますが、中国に発した言葉でございまして、今から約2000年前、中国に易経という儒教の古典がありますが、この中に観光という言葉が初めて現れておりました。それを日本が導入したものでございまして、恐らく奈良時代ぐらいから、この言葉が日本に入ってきたのだらうと言われております。実際に使われるようになりましたのは、明治前の幕末ぐらいからでございますけれども、そういう非常に歴史のある古い言葉でございます。

どういう意味かと申しますと、日本語に訳しますと、国というのは「地域」という意味でございますから、「地域」の「光」、「光」というのは「優れたもの」という意味ですね。「地域」の「優れたもの」を見る。観光の「観」の「見る」という字は「心を込めて見る」、「心を込めて学ぶ」という意味が、この「観」という字には含まれているようでございまして、単なる見物の「見」ではなくて、「観」という言葉は「心を込めて見る」、「心を込めて学ぶ」という意味だそうでございます。同時に、この「観」という字は「しめす」とも読むわけでございますが、これはその「地域」の

「優れたもの」を「誇りをもって示す」、人々に見てもらおう。あるいは「誇りをもって心を込めて示す」そのような意味があるそうでございますから、「心」というものが観光の中に必ず入っていることと、「学ぶ」という要素が非常にそこに深く入っているということをご理解いただく必要があるかと思えます。そして、そのようなことをやって、人々が交流をすることが非常に大切なことであるということ、当時の「易経」は人々に教えている、こんなふうには理解をいたしております。

ところが、戦争中に、この観光という言葉を使うことを、当時の軍部は禁止をいたしました。不急不要の政策だということで観光ということをやってはならないと禁止令さえも出たことがあるように聞いております。そのときに観光という言葉は使われなくなりました。戦後、観光という言葉はもちろん解禁になったわけでありまして、誰も観光という言葉を使っていなかったわけでありまして、観光という言葉は、いわば空白になっている時期があったわけです。そこで観光という言葉を使いだしたのが、大変残念なことでございますが、風俗営業、それも一部でいかがわしい商売をしている方々が、よくこの観光という言葉を使いました。そういう風俗営業の中には、何とか観光というような会社が非常に多かった。そういうことありまして、どうも観光ということは単なる遊びだと。しかも比較的次元の低い、低俗な遊びだというようにとらえてしまっています。あるいは観光に付帯をしているものではあろうかと思えますけれども、夜の宴会、それもドンチャン騒ぎ、そういったものが観光の一部とみられたということもありまして、そのところだけが誇張されて多くの方々に理解をされてきた。大変不幸なことだと存じます。

最近でも新聞で見るわけでございますけれども、都道府県や市町村の議会の先生方が、外国の経済事情を、あるいは外国の議会事情を視察するといつて海外に出張されます。よく新聞に出ますのは、そういう方々が海外のそういった議会事情を視察に行ったにも関わらず、帰りに観光をして帰っ

てくる、けしからんじゃないかと、税金泥棒だというようなことが新聞で糾弾をされます。ごく最近もありました。私はその言葉を見ておりますと、観光ということが誤解を受けているなど、全くそういった仕事とは無縁のものだと思われています。後で申し上げますけれども、観光は文化でございいますから、議会事情の視察においでになりまして、地域の文化を見てこられるということは、決して悪いことではないし、大事な出張目標の中でもあろうかと思うわけでございますから、「よく行ってきた」と言うべきなのに、日本ではそれを税金泥棒扱いにします。それを「あの人は観光に行ってきた」と。恐らく夜、ドンチャン騒ぎをやってきたんだらうとか、そのような連想がそこにあります。

私が観光のお手伝いをしておりまして感じますのは、大きな企業に参りますと「今、私どもは忙しい」、「観光なんか、そんなことをやっている暇はない」、「暇な人にゆっくりやってもらってください」といって、協力をしてくれない会社が今でもまだございます。ものづくりのほうが観光よりも上だと思っている人もいます。上でも下でもございませぬ。そのようなことを、やはり誤解のないようにご理解をいただいた上でお話を聞いていただきたいと思うわけでございます。

要するに観光というのは、人と人との交流を、地域の優れたものを見たり学んだりすることによって促進しようというものでございます。人と人との触れ合いが文化を生むわけでございますから、大きな文化活動でございいますし、また同時に人が移動することによりまして、そこに経済効果が発生をいたします。経済行動でもあるわけでございまして、地域の活性化につながるわけでございます。したがって、私どもはそのような非常に前向きなと言いますか、次元の高い仕事だというように観光を考えておりますので、どうかひとつ、そういった意味で観光の問題についてご理解を賜りたい、これをまず冒頭をお願いを申し上げておきたいと存じます。

そこで奈良の問題になるわけでございますが、私どもなりに奈良の観光

を考えてみたいと思います。観光と申しますのは、非日常的体験をすることが観光であるという側面を持っておりますから、地元にいる人が、案外観光というものに関心をもちません。他の地域の人々が非常に関心を持つ観光資源について、地元の人はそのように関心をもちません。私はお隣の京都の出身でございますけれども、京都の人は金閣寺や銀閣寺などには、あまり行きません。修学旅行であそこに行くことにはなりませんから。遠足に行く場所でもありませんから、私は金閣寺には学生時代に焼けるまで1回も行ったことがございませんでした。金閣寺が焼けました。これは坊さんの放火で焼けた非常に残念な事件だったわけであります。京都の人はどこへ行ったか。銀閣寺に行ったわけであります。もうじき焼けるかもしれないなと思ったから。私も隣のおばさんと一緒に銀閣寺に行きました。まわりは全部京都の人です。異口同音に言っているのは、初めて見たと、銀閣寺を。足利義政と足利義満とは違うんですけども、まあ、似たような時代のものだから、金閣寺と。「今のうちに見ておかないかんと思って来ました」と言うんですね。焼かれると思っているんですね。幸い、焼けませんでした。今も健在でございます。そのときに分かったことは、あんな有名なものでも、自分たちは行ってないということに気がついたんです。そのようなものでございます。

だから皆さん奈良にお住まいの方が大勢いらっしゃると思いますが、奈良ぐらいになれば、そんなことはないと思いますけれども、案外、よその人が見て「いいなあ」と思う奈良について、普段、何とも思っておられないんじゃないかと思います。駅を降りてすぐに、あのように緑が広がっているような都会は日本にはありません。このような県庁所在地はどこにもないんです。奈良の方は当たり前だと思っていらっしゃるでしょうから、別にあれを見ても感激されないでしょうけれども、私どもは感激をいたします。静岡へ行きますと、富士山を見ると感激をいたします。静岡の人は富士山を見ても何とも思わないそうであります。「何で富士山を見られな

いんですか」と言ったら、「何で富士山を見なきゃいけないんですか」と言われたことがありますから。そんなものなんですね。だから、よそ者が見る観光というのは、案外、地元の方と違った視点からものを見ているかもわかりません。したがって、今からよそ者が何を言うかとおっしゃるかもしれませんが、よそ者は奈良をこういうふうに見ているんだということを、一つご紹介申し上げるのも無駄ではないと思うので、今日はそのような観点に立って、よそ者の見た奈良、そういうふうなことで、しかもそれをこれからどういうふうにしていきたいかとよそ者は考えているか、そのようなことを申し上げていきたいと思います。

言うまでもございませんが、奈良は日本の文化の発祥の地でございます。日本の歴史が神話時代から脱皮をいたしまして、ようやく日本の国が国らしい体制を整えたのが大和朝廷だと歴史の本には書いてあります。大和というと、奈良県でそのような国が起こったわけであります。神武天皇が今から2千数百年前に橿原宮をお造りになったというのがあります。これは神話だから史実じゃないと言う人もおりますけれども、そういう神話がやはりあるということは、奈良県が相当昔から、日本の国の一つの「まほろば」であったということの意味しているかと思います。

しかもここで大きなことがございましたのは、日本の文化がここで育まれてきたわけでございますが、その文化というのは、固有の文化と、日本に昔からあった文化と、それから大陸諸国、つまり中国から入ってきた文化とが遣唐使、遣隋使、いろいろなものがあつたわけですけれども、そういうものを通じながらここに導入されて、それが融合されて、独自の日本の文化というものを作り上げる過程が、この奈良で営まれたということでございます。平城遷都1300年、平城京にはこの大陸文化も含めた日本の本当の固有の文化というものが新しい姿で凝縮されたものであつたことは皆様ご承知のとおりだと思いますが、それが生み出された地域は、ほかでもない奈良でございました。日本のまさに文化の発祥の地であり、日本の国

の発生の原点だったと思います。

また、経済・社会の中心地として長く奈良は発展をしまいにしました。平城京時代がまさにそれでございますけれども、あの「あをによし奈良の京は咲く花の」と言われますように、経済の発展を謳歌したああいう時代も、この奈良にはございました。日本の経済・文化というものは、ここで日本の中核として、今の東京と同じような役割を果たした時期がかなり長い時間あったということでございます。これも忘れてはならないことでございます。このようなことがあったために、その後長く奈良は日本の観光地として、世界的な観光地として内外から多くの観光客を呼ぶことになりました。そしてここで観光交流中枢として奈良の発展が今日まであったと、このように私どもは理解しております。

なぜ交流というところに力を入れて申し上げたかということ、今、日本は人口が減りだしております。今、1億3000万人口がございますけれども、もうすでに減少局面に入ったと言われております。これから2050年ぐらい、今世紀中ごろになりますと、日本の人口は1億人を割るそうでございます。今世紀末、つまりあと100年足らず後には、日本の人口は6,700万になるという説があります。これは今のままで推移すればでございますから、夫婦で1.3人という平均出生率からいけば確かにそうでございますけれども、このままでいくとは思えませんけれども、減ることだけは間違いありません。少なくとも生産年齢人口、成人の人口だけは、これから20年先までは何人だというのが分かっているわけでありますから、減ることははっきり目に見えるわけでありますし、高齢化社会がそこに到来をいたします。そうになりました場合に、人々の交流ということが、これほど大事になっていく時代はないと思います。ということは人々の交流が文化を育むわけでございますから、人々の触れ合いが少なくなれば、文化の生成発展がそれだけ遅れていくことになります。

しかしここで一人の人が毎年3人の人と交流をしておったと、そのよう

なことはないでしょうけれども、仮にでございます、それが6人の人と交流をしたといたします。倍になったといたします。そうなれば人口が、極論すれば半減しても、人と人との交流の頻度、局面は変わりません。こういうことになると思います。そうなりますと、これから人口が減るのでありますならば、一人の人がより多くの人と交流をします。これが社会の発展をさせます。文化の発展をさせる原動力になるわけでございますから、これから私どもは、日本の発展を考えます場合に、今までのような定住人口が何人いたかという議論よりも、交流人口がそこに何人あるかということのほうが、私は重要ではないかと思えます。

交流をするためには、もちろんビジネスでの交流もでございます。しかしこれは今、IT機器その他、携帯その他いろいろございますから、そういうものがあれば、人と人との交流はなくてもビジネスは進んでまいります。テレビ、インターネット等もあるわけでございます。冠婚葬祭も交流の要素です。冠婚葬祭というのは、これは限度がございます、一人の人が何度も結婚式をやれば別でございますが、そのようなことはないわけでありますから、これは限度があります。そうなったら交流を大きく増やすのは何かというと、観光しかないわけであります。ビジネスも限度があります。冠婚葬祭もそうです。人々の交流をこれからどんどん盛んにするきっかけになるものは何か。私は観光しかないと確信をするわけでございます。奈良が日本の交流の中核としてこれまで発展をしてこられましたけれども、ますますこれを発展させていただいて、日本の交流の中核になっていただければ、これから奈良は新しい日本の文化の中核になるだろうと思えますので、そのようなことを期待をいたしながら、奈良の将来を見てまいりたいと思っております。

そういうところから見ると、それでは、奈良の観光というのは一体どういう状態にあり、どういう課題があるのでありましょうか。そのお話に移ってまいりたいと思えます。今、観光客の観光のニーズ、どういう観光をし



たいかということが急速に変わっております。それから観光客の形態、いわゆる観光の仕方ですね。これも急速に変わっております。もっと残念なことが、最近十数年間を見ておまして、日本の国内観光はほとんど増えておりません。皆さん方は、外国へどんどんおいでになることになりましたけれども、国内観光にどんどんおいでになっているわけではありません。なかなか観光客の正確な数値というのは、全国的には、今、統計がまだできておりませんので、ないわけではありますが、あらゆるデータをとって、例えば観光土産物の販売実績を見ても、宿泊施設でもお泊りになった方の数を見ても、いろんな統計を見ましても、観光客は実は増えておりません。国内で増えているのは、ディズニーランドぐらいだそうでありまして、伝統観光地でも、そんなにどんどん伸びるわけではありません。京都は若干伸びているようでございますし、奈良は今年はどういった事情がございましたから、非常に対前年比が大きくなっていると思いますが、これもここ10年間ずっと並べて見た場合、それほど大きくは、奈良でも増えていないと思います。低迷状態にあるわけです。

それは一体なぜなのかということを考えてまいりますと、観光の形と、それからニーズが変わってきたことに対して、観光地が対応しきれていません。悪く言えば、観光の国際競争力というものが日本の観光地から失われつつあるからだというように考えざるをえないと存じます。例えば、どのように変わってきたのでしょうか。まずは形でございます。従来は団体が中心でございました。大口の団体、農協さんの団体だとか、お得意先招待旅行とか、職場旅行とか、要するにバスを連ねていく、あの旅行ですね。これが日本の観光の中心でございました。私もそうですが、恐らくここにおられる多くの方々も、最初に観光旅行をなさった経験は団体旅行ではなかったかと思います。修学旅行しかりでございます。それが最近、急速に実は減っておるわけであります。そしてどうなっているかというと、小人数のグループ旅行ないしは家族旅行、極論に言えば、一人旅行のようなも

のが増えてきています。そういう傾向が顕著でございます。

修学旅行は今でもございますけれども、これも実は変わってきておりまして、奈良でもそうかと思いますが、京都などは特にそうなのですが、みんなで一緒に列車で来て、ホテルに泊まって朝一旦解散するんです。そして何人かのグループに分けて「バスでもタクシーでも何でもいいから町の中を回ってらっしゃい。地図をあげるから」と。夕方再集合になります。「後でレポートを出せ」こういうやり方です。これを分散学習と申します。今までのように先生がガイド引率のもとにゾロゾロと隊を組んで歩く、あるいはバスで動くというやり方ではないのです。では、行き帰りもバラバラに行けばいいじゃないかという議論があるのですけれども、これは行き帰りをバラバラに行きますと、JRが割引をしないわけでありまして。JRと一緒に乗ってもらわなければ割引はしません。私どもの都合のいい、なるべく空いた列車をお使いいただくときに限って、特急券も割引くわけです。だから行き帰りはご一緒においでになります。ところが、先ではバラバラになります。それはなぜかという、もう、児童・生徒の方々でさえ、みんなニーズが違うというのです。見たいところが違います。お互いが自由にそれを回らせたらいいんだ、グループごとに。そして後でみんなでレポートを出して反省すればいいじゃないかというふうに変ってきております。分散学習。約6割ぐらいの修学旅行が、すでに分散型です。

そこまでいっているのでありまして、今までの団体旅行がだんだん減ってきております。だから大きな観光地でございますが、大きなビルを建てて、十何階かのホテルがあったり、旅館があったりいたしますが、あれがみんな多くは閑古鳥が鳴いています。それが旅館の経営を大変苦しめております。そのような状況です。それはなぜか。皆さんが情報をご自分の手でおとりになるようになりました。携帯を見れば情報が流れております。今までのすとガイドブックと、それから旅行会社の窓口で相談するしかありません。そうなると同じ答えが返ってきますから、みんなニーズが一緒

になるわけですから、団体で一緒に行きます。今は、自由に情報を選択できますから、自分もその中から好きなものだけ選び出せます。そのため、今度は気の合った者同士で行こうということになるわけですから、当然団体旅行というのは減っていくのが当たり前なんです。

ところが、観光地はそういうふうにはできておりません。今の大きなビルディングが問題になっているように、昔のままの対応をやっているところが多いですから、ニーズと現実とのギャップがそこに出てきたわけですね。これが国内観光から足を遠くさせているひとつの理由だと思います。

次に、ニーズの変化であります。最近のニーズは何か。体験観光、学習観光のニーズが非常に高くなっているということが言えます。従来は見物観光でありますから、大勢の方々が名所・旧跡を見る。単に見る。景色のいいところを見て「良かったな」という観光ですね。あるいは、せいぜい温泉に入る程度の観光。私どもは見物観光と申します。悪い言葉では、いわゆる物見遊山になるかもしれません。これが中心でございました。今の方々は、いろいろ調査をしたり、アンケートをとりますと、そうではないわけでありまして、体験をしたい、観光地で何かやってみたい、焼き物を焼いてみたり、あるいは染物を染めてみたり、場合によればスポーツをしたり、何か観光地でやりたいんだと。能動的観光ですね。そのニーズが非常に高うございます。特に若者にそのニーズが高い。

それから次に、今度は学習観光になります。これはご年配の方に多いのでありますけれども、勉強をして観光地に行きたい。それから、観光地で何かの勉強をしたい。そういう方々が非常に増えてきております。ご年配の方の観光客が最近非常に増えてまいりました。元気なお年寄りが大勢おられるということもあるのでありましようけれども、そういう方々は若い時にだいたいのところに行ってらっしゃるんですね、京都でも奈良でも。今度行くのであったら、勉強して京都や奈良に行きたい。すると違った角度でものが見えるのだと。こういうふうな見方であろうかと思えます。

東京や大阪、名古屋等で、奈良や京都の文化講座を私どもは観光客誘致のためにいたします。抽選が要るほど大勢の方がお見えになります。ほとんどが年配の方です。熱心にメモをされて、奈良、京都へおいでになる。そうすると楽しいそうであります。今までと違った角度でものが見えるとおっしゃいます。また、現地においでになって、こういうところにおいでになっても、いろいろそこにある説明を自分でメモしたり、案内の方々の話をよく、克明にメモしたりして保存されて、帰ってきてそれを読むと、懐かしい、面白いとおっしゃる。そういう観光が増えてきているわけですね。奈良学という言葉があるほどです。

ところが観光地の場合には、必ずしもそういう勉強する人のための受け入れ態勢というものはありません。私どものほうも文化講座をやるから満員になりますけれども、先生の数にも限りがありますから、そういつもいつも文化講座をやっているわけにはいきません。そういうニーズが満たされていないのです。それが今、日本の国内の観光地が何となく人々の満足度が高くない大きな理由だと思います。学習観光、大事でございます。それに応えないと観光地はこれからやっていけません。

日本の観光地はそういうことであまり面白くなくなりました。だから外国に行こうと、みんな出かけていきました。毎年、千数百万の日本人が外国に行きました。ここにおられる方も恐らく一人残らずどこかの外国に行っていられっしょう。30年ほど前に、ここで外国に行った人は手を挙げてくださいと言ったら、誰も手が挙がらないぐらい、今はそのようになっているんです。要するに、日本の国内観光は、海外観光にも負けてしまったわけですね。

そういう方々も、しかし、海外を一巡してまいりました。もう一遍日本を見たい。味噌汁の味が恋しいものでありますから。ところが、それに対して日本のニーズに観光地が応えられないから、今度は観光をやめて、テレビゲームを買ったり、あるいはオペラや音楽会を鑑賞したり、そういう

ところへお金をお使いになるようになりました。あるいはショッピングにお使いになるようになりました。そこにお金を使うから、もう観光はやめだ。だから日本の国内観光は伸びないのです。

国交省の統計によりますと、昨年、日本の国民一人当たり、観光旅行に出た回数はわずか1.5回です。しかもこれはここ数年来ずっと減りっぱなしです。平均宿泊数2.3泊です。国はせいぜい4泊はしてほしいと言っているのだそうですけれども、2.3泊です。ほとんど、1泊旅行が中心だということが分かります。あるいは日帰りを中心だということが分かります。さびしい限りでございますから何とかしていかなければいけません。

そういうふうなことを考えて、ニーズを考えて、形態を考えますと、これからは奈良のようなマルチ観光地、つまりあらゆる観光ニーズに応える観光資源が全部そろっているところ、これをマルチ観光地と申しますが、有名な観光地では京都、奈良、鎌倉ぐらいであろうと思いますが、そういうところ。それから新しい工夫をしたところ。例えばディズニーランドのような、あそこにあるものはみんな模型でございますけれども、模型なりに精巧に工夫がしてあることと、ディズニーランドは毎年出し物を変えます。あそこは今でもリピーターとって、同じ人が何遍も行きますから、どんどん増えているのです。日本の観光地では一人勝ちのようになっています。

それと同じことを観光地でやるにはどうしたらいいかということになりますと、こういうふうにはたくさん資源があるところで、今までと同じやり方をやらずに、違うやり方をやっても、ここはいろいろな観光資源が生きてくる場所ですから。それをやれば、ここにもリピーターがいくらでも来るわけであります。京都がそれほど減っていないということは、京都にはものすごい数の観光資源があるからです。お客様のアレンジに応じて、いろいろなものが用意されますから、あそこは観光客が少しずつ増えているわけです。奈良にもそういう傾向はあると思います。これからはこの奈良

のようなマルチ観光地、あらゆる面から見た観光資源がすべてそろっていると、これがこれから伸びる、私は日本で少数の観光地ではないかと思っています。どういうところにあるかは、これから申し上げていきます。

同時に大事なことは、観光というものは、まちづくりと切り離しては具合の悪いものだと思います。観光客を迎えるのにまちづくりは必要です。駐車場のない観光地というのは、今や恐らく成り立たないと思います。あるいは、それから道路でも、道路をあまり大きく変えようと、観光資源が乱されますから難しいのですけれども、いろいろやはり、地下道路なんかを入れてでも道路交通をスムーズにしなければいけません。そういう、いわゆるハードのまちづくりも必要です。

それと同時に大事なことは、ソフトのまちづくりになります。地元の皆さんがもてなしの心、観光客を温かく迎えるという心で、奈良の方がいていただけるかどうか。温かくという以前に、観光客だと思ったら「やあ、こんにちは」と声をかけたり、「今日はいい天気ですね」と、いろいろなことを声をかけて、そこにコミュニケーションを作っていきます。そういうことが大事でございますので、市民参加の観光、そういうふうなことが、やはりこういうマルチ観光地には非常に大事なのでありますけれども、それがこれからの大きな課題ではないかと思っています。すでにそういうことを、このならまちの観光で、私は実は体験をいたしました。ボランティアのガイドの方に親切に案内していただいて、地元の商店の方々から声をかけていただいて、楽しい観光をさせていただきました。今日はそこへ伺えるので、非常に喜んで来たわけでありまして。そのようなことがすでにこの町にもございます。そのようなことも、これからの新しい観光では大事なことでないかと思っています。

それと、やはりさきほど申し上げましたように、全体的に観光資源というものをもう一回見直してみます。この段階で、新しいニーズを踏まえて、観光資源の棚卸をします。あらゆるものが出てくると、今まで知

られていなかったものが。例えば観光資源を、従来は自然観光資源と景観観光資源、景色ですね、それと歴史文化、古墳とか神社とか仏閣とか、奈良にはもちろんたくさんありますけれども、そのように分けて観光資源をとらえておりました。今度はそれを横串を入れて、横割に見て、観光資源を見たらどんなものがあるのか。例えば私がいつも言っているのですが、産業観光というものがあります。ものづくりの観光です。ものづくりという面からものを見れば、すべてのものが違った角度から見えてきます。あるいは都市観光です。奈良という町を、全体として出てくる一つのムード、雰囲気としてそれを味わう。ならまちはそうなんです。ならまちの中のどこかの土蔵を見るとか、そういうのではないのです。ならまちを歩く。あそこでいろいろ人々に接する。コミュニケーションをとる。あそこでいろいろなことを、食事をしたり、買い物をしたりする。あの町をそぞろ歩きをする、歩くこと。ならまちそのものが観光資源になっているわけでありませう。

従来の奈良であれば、奈良の興福寺とか春日大社とか、大仏殿とか、そういうものが奈良の、奈良なりの観光資源でした。今度は奈良という町全体が、歩くと何となくそこに一つの風情がある、奈良はそれがあるわけですが、人間のつくった歴史・文化観光資源がそこにありますが、それを町という面から横に並べて見れば、違う側面がそこに見えてきます。そして新しい観光資源ができた後、同じような効果がそこにあります。そういうふうなことができるように、まちづくりをソフトとハードでやっていきます。このようなことも、やはりこれからの奈良の一つの大きな方向ではないだろうかと思えます。

では具体的に、今度、そういうことを念頭に置いていただいて、新しい角度から奈良の観光というものをもう一遍見直したら、どのようなものがあるだろうかということを、よそ者の目で、以下ちょっと具体的に申し上げてみたいと思えます。もし何を言っているのかということがありました

ら、後で皆さんのほうからのご質問をいただく中で、あるいは何かご質問状を出していただくのだと思いますが、その中でお教えいただければ、またお答え申し上げたいと思います。

まず、ここに書いてあるような自然。史跡・自然・伝統・産業観光、あらゆるものに奈良は全国でトップクラスのものが実はあると。しかしそれが観光資源として認知されていないものが、まだ非常に多いということをおっしゃりたいと思います。例えば史跡。古墳については、これはかなり最近、古墳に対する関心が非常に高まりました。これは一つの前進だと思います。高松塚がそうでした。しかし、あまり大勢の人が来て、今度は資源の保護との関係で問題を生じていることは事実でございますけれども、古墳についてはかなり、いろいろなイベントがあった関係で、知識が深まって、皆さんも奈良にある古墳というものを再認識なされたと思います。

それから、お寺や神社については、これまでも有名でございます。しかし、そのお寺や神社の中でも、案外知られていないものがたくさんあるのがあります。例えば、最近もお話ししたときに「ああ、そんなことですか」と言われたのでありますが、手向山八幡というのがあります。あそこに校倉が2つか3つあります。校倉ですね。丸太を組んだ昔の正倉院と同じものです。正倉院は一般に公開されておりませんから、なかなか、いつも見るわけにはいきません。しかし校倉づくりのあの建物というものは、手向山八幡に行くとも見られるのです。ああいう、建築に非常に興味のある方が、一種の産業観光ですけれども、手向山八幡を見て非常に感動したという話を最近聞きました。ただ、しかし、奈良の観光の名所をずっと見てまいりました場合に、手向山八幡の校倉というものは、そんなに取り上げてはいない。しかし、見る人が見れば、あれは素晴らしい観光資源だということをおっしゃっていました。例えばそのようなものがあるわけです。お寺や神社も、従来のお寺や神社と違う角度からものを見る。東大寺も、恐らく大仏



殿のほかにも、いろいろな宝物がほかにあると思います。隠れたものが。あるいは大仏のカゲで覆い隠されて見えないものがあつたかも知りません。そんなようなものを発掘しただけでも、中には素晴らしいものがあると思います。いろいろなものがいろいろなところで眠っていると思います。

それから、私は一つここで、皆さんに変わったことを申し上げようと思います。奈良に天皇陛下の御陵がたくさんあるのはご存知でしょうか。日本には天皇陛下の御陵が90数ヶ所あります。今の天皇陛下が歴代125代目の天皇であります。124の実はお墓はないのです。これは幕府の時代で、皇室の勢いのないときには、お墓を造営する力がなかったから、10何人かの天皇陛下を一緒にお祭りしてあるお墓があるのです。したがって、90いくつしかありませんが、その中の3分の1が奈良にあるということを、皆さんにぜひご理解いただきたい。その多くは大古墳であります。しかもそれは非常に歴史的に価値があります。また、見ても非常にきれいな、緑に覆われたものがあちらこちらにあります。これもあまり奈良の方がご存じないので驚きましたけれども、奈良の三条通り、メインストリートであります。あそこに開化天皇の御陵があります。春日率川坂上陵（かすがのいざかわのさかのえのみささぎ）と申します。あれは第11代目、10何代目かの天皇の御陵ですが、ああいうものが町中にある、非常に珍しいケースです。神武天皇の御陵もあります。畝傍御陵前駅という電車の駅ができておりますが、あれは昭和15年にああいう名前がついたのですけれども、神武天皇の御陵と伝えられている古墳があります。畝傍山東北陵（うねびのやまのうしとらのすみのみささぎ）と申します。あの辺に、神武天皇から10数代目までの天皇陛下の御陵が全部並んでいます。大古墳群です。ただ、それが本当なのかどうかは、それは神話時代のものですから、正確ではないかもしれませんが、一応、宮内庁がちゃんと認定をしたものです。

しかもあの御陵は宮内庁の手によって実にきれいに整備されておりました。古墳として見た場合に、あのように見事な古墳が保存されているとこ

ろはほかにありません。見ただけでも大変なものです。しかもあの中に一つの番小屋が建っています。昔はあそこに陵墓官という宮内省のお役人が毎日詰めておりまして、掃除をしたり、清掃をしたり、いわゆる整備をしたりして、同時に御陵のハンコがあるのです。御陵印という、あれをただで、誰にでも押してくれました。私どもは小さいときに、御陵印をいただくために集印帳を持って御陵まわりをしたことがあります。だから知っているのです。そのようなものがあります。あれをまわるだけでも相当な勉強になります。あるいは相当な観光ができます。奈良の方は、あれだけのものがあるのだけれども、奈良の御陵を紹介したものを私はあまり見たことがありません。あれだけでも大変なものがあるのです。奈良県と大阪府と京都府にしか、御陵がまとまってあるところはないのですから。あとはバラバラとある程度でありますから。これは非常にすぐれたものであります。案外知られていません。しかもその御陵というのは、全部、江戸時代に文献で整理をされまして、その御陵に納まっている天皇陛下のお名前、それからいつ即位をされた、いつまで在位されたか、その時代にどういうことがあったかということが全部整理された文献になっています。これを御陵の中には掲示しているところもありますけれども、御陵にきちんと掲示をしたら、あれを歩くだけでも歴史の勉強ができます。私が歴史に興味があったり、歴史のことを割合詳しいのは、御陵まわりをしたからです。

ちょっと余談ですけども、近鉄の尼ヶ辻という駅が西大寺の次にあります。あそこの駅前に垂仁天皇の御陵があります。御陵名は菅原伏見東陵（すがわらのふしみのひがしのみささぎ）と申します。立派な大前方後円墳です。あそこに大きな堀があります。あの堀の真ん中に塚があるのをご存じですか。小松の立った島があります。あれは誰のお墓かといいますと、田道間守のお墓になります。田道間守。恐らく年配の方は、小学校のころに「田道間守の歌」というのをお習いになったと思いますが、「忠義の人よ田道間守」という歌がありました。あれは垂仁天皇の家臣なのです。

けれども、田道間守という人が。天皇陛下が非時香菓（ときじくのかぐのこのみ）というのを食べたいと言ったというのです。これはみかんのことであります。そこでその人が、海を渡って、今で言うと中国、大陸と言われているのですが、中国に行って非時香菓を持って帰ってきました、ものすごい苦勞をして。そしたら、すでに天皇が亡くなっていました。それで、その人が追死をして、要するに後を追ったわけですね。それが当時、戦争中に、「忠義の人よ田道間守」の歌になったわけでありまして、小学校唱歌になりました。しかも天皇はその方の功績を非常に高く評価をして、極めて異例なことですけれども、垂仁天皇の御陵には田道間守のお墓が御陵の中に一緒に入ったのです。あの堀の中には培塚は、田道間守のお墓だと言われております。それを見るだけでも一つの歴史の流れというものを、そこに感じます。そのようなものがあるわけであります。

山の辺の道に参りますと、景行天皇の御陵があります。あそこにも天皇陛下の御陵が3つか4つあります。近鉄の平城の駅前のところに3つぐらいあります。市内にいっぱいあるわけですが、聖武天皇の御陵とかですね。これを全部まわれば、大変な歴史の勉強になります。それから、いろいろ、学習観光にもってこいの材料です。しかも古墳の形が皆違います。これは一つの学習観光だと思います。天皇陛下の御陵に観光という言葉を使っただけではいかんという人がかつておりましたけれども、さきほどのような意味で観光という言葉を使うなら、決して失礼でも何でもありません。まあ奈良の方はご存じでしょうけど。御陵も新しい歴史勉強の大きな材料、歴史文化観光の大きな材料だと思います。

それから自然でありますけれども、奈良はこういう盆地ないしは、こういう山に囲まれたところですから、万葉集でうたわれるように、じっくり見れば、素晴らしい景観だと多くの人が申します。大和三山にしても、奈良からの生駒とか三輪の山並みとか、ああいうようなものを見たりすれば、これは奈良の場合も極めて自然に恵まれたところだと言えますし、素晴ら

しい景色だと申します。吉野熊野地方はもちろんであります。

そのようなことで、奈良の景色というものも、もう一遍、今までにない観点から、本当に日本のふるさとにふさわしい、緑に囲まれた奈良の景色というのをじっくり味わえば、こんなに味わいのある景色はないということ専門家が申しております。「花とみどりの国」でもあるわけでありませぬ。

例えば若草山というのがありますけれども、あれとて、若草山という名前前でわかるとおり、緑に囲まれた山でありますし、普通の山とはちょっと違います。誰でも気軽に上がれます。今、若草山は知られておりますけれども、あのような奈良の自然というものに親しもうという動きはもうひとつありません。それをもっと考えたら、奈良公園の景色でも素晴らしいものがあると思います。ただ、奈良の方は、あれはいつもありますから、何とも思わないかもしれませんが、よそから来ると感激します。それがそこにあるということ、なかなか情報発信されませんから、駅を降りた人はすぐに大仏殿に行って、興福寺と春日大社ぐらいいに行って、すぐに京都へ行って泊まってしまふんですね。これでは残念です。

伝統は言うまでもございませぬ。いろんな民族宗教行事もあります。お水取りはよく知られておりますけれども、あの種の伝承はいろいろな神社や仏閣にほとんどあると申します。ただ知られていないだけだと。だから、それをもっともっと知られるようにすれば、民間伝承の行事だけでも大変なものになると思います。そういう行事を、今度は日程を調整することによって、大観光資源になった例があります。

東北の三大祭りがそうですね。あれは少しずつ日程を調整して、全部を3泊で巡れるようにしたことによって、観光客が激増いたしました。石川県にある能登半島にキリコの祭りというのがあるのですが、これは火祭り、梵天祭りなんです、これも能登半島の町は全部やる祭りだそうでありませぬ、8月に。その日程を調整して、同じ日にあちこちでやるのではなくて、

日にあちこちでやったら見られませんから。すると、日程を少しづつずらしたら、ものすごい観光客が増えたという話があります。奈良の伝統行事というのはいっぱいあると思いますが、この中で二月堂のお水取りの行事以外は、あまりその日程がはっきり知られておりません。これを一遍日程上整理をして、若干、それは宗教の問題があるかもしれませんが、日程の調整ができれば、伝統行事巡りだけでも、一つの大きなものにできるような、そのようなものが私はあるだろうと思います。

町並み、家並みは言うまでもございません。ならまちは、それが実は大きな資源になっているわけでございますし、橿原のほうに行きますと、三角の独特な屋根のあった町並みが、今、残っております。ところが奈良というのは、お寺と神社を見る。この奈良市のお寺と神社というのとか、そういうものとか、一部の古墳に注目がっておりますから、そういうものについての注目が及ばないんですね。それをやはり及ぼさなければなりません。残念だと思いますけども、そういうようなことをやって資源の棚卸をする必要があります。それが急務ではないかと思えます。

それから、さきほど申し上げました産業観光。これも、ここは伝統産業から近代産業まで、すべての産業がそろっております。例えばこの町では墨を生産しています。日本のほとんどの墨はここでできるそうでありますけれども、そのようなものがあったり、伝統産業も、墨は生活の身近なものですから、製作過程をみんなに見せたり、あるいはみんなに体験してもらったりすることができると思えます。近代産業も最近、いろいろ、特にここは海がございませんから、重厚長大ではございませんけれども、いろいろな精密機械が立地しております。これなどを見学させれば観光資源になります。そのようなことも取り交ぜてまいりますと、ほかにもいろいろな観光資源の宝庫が眠っていると思えます。

交通についても同様です。奈良県は全国のこの程度の人口規模の県では鉄道が発達している非常に数少ない県であります。これは民鉄が発達して

いるということと、大阪に近いということがあったのかもしれませんが、このように鉄道の密度が高い県はそうほかにありません。しかもその電車が、よそであれば、地方は30分に1本とか1時間に1本ですけれども、ここは5分に1本ぐらいで走っているのですから。近鉄などは。そのようなところはほかにありません。非常に交通の発達しているところであります。しかも日本で最初にケーブルカーができたのは、実は生駒山なんですね。あのケーブルが今は二重のケーブルになっていまして、全国にケーブルカーの行き違いが2つも並んであるところというのは、あそこしかありません。あれだけだって、立派な観光資源です。もうすでに相当の鉄道マニアが訪れております。そのようなことを考えれば、交通を見るだけで一つの観光資源になる、そのようなところではないだろうかと思えます。この奈良の鉄道網というものをよく勉強してみれば、みればみるほど素晴らしい。これもやはり探訪の余地の観光資源ではないかと思えます。

まとめの話になってまいりますけれども、今のようなことを念頭に置いていただいて、もう一遍皆さんが奈良の町を見直していただければ、いろいろなものがそこにあるということがお分かりいただけると思えます。皆さんはご存じだと思います。ただ、このようなものが観光資源になるのだろうか、あるいはここにいつもあるのだから、いつでも見に行けるとっておられるのが地元の方だと思うのであります。よその人に見せたらどうなるかという発想で、もう一遍これを整理をしていただいて、情報の発信をしていただければ、奈良にはまだ新しい魅力がそこに生まれると思えます。またそれを中心にして、奈良をこれから新しい交流都市にしていく、これがこれからの奈良のビジョンではないかと、ビジョンの一つではないかと私は考えます。

ではどうしていったらいいかということでもありますけれども、さきほど申し上げましたように、学習観光、体験観光の場はいっぱいあるわけがございますから、観光資源を、そういうようなものとして生かしていただき

たい。特に歩くという、最近ウォーキングと言いますが、歩くこと自体が非常に盛んになってきておりますから、飛鳥だとか山の辺の道とかいろいろ道があります。そういうものを歩く。その前に何かちょっとした案内指標をつけてあげるとか、あるいは、その歴史적인ものを分かるような看板でも、同じような様式のもを整備して、メモをしながら歩けるようにしてあげるとか、いろいろなそれは配慮が必要です。自動車のコースと分離して歩ける道というようなものをつくって、そのマップみたいなものを出すとか、そういうようないろいろな発信は必要です。

体験観光でも同じです。例えば、御陵は昔と違って、各御陵ごとに、宮内庁の人が常駐しておりませんが、陵墓監区というのがありまして、一定の御陵の集まりのところに、陵墓官がいて、そこに御陵のハンコが集約してありますけれども、そのようなハンコとか、お寺や神社にも必ず朱印と言いまして、神社のハンコとかお寺のハンコを捺していただく。奈良県はあつという間に集印帳が3つも4つも埋まるようなところなんです。これだけでも相当なものなのです。

そこで大事なことは、観光資源の体系化ということです。なぜかと。このように観光資源がたくさんある、しかも、ものすごい数のものがここにまだあります。知られていません。残念なことです。では、これを知らせるためには、ただここにもある、あそこにもある、あれにもあるよといったら、今度は目移りがして、どこから行っていいか分かりません。従って奈良の観光にとって、これから非常に大事なことは、観光資源のネットワークをつくり上げることと、それから体系化をすることだと思います。

皆さん方、空の星をご覧になってみてください。空に星がたくさん見えます。今は空気が澄んでおりませんから、都会ではあまり見えませんが、それでも天気のいい日にはかなりの星が見えます。八ヶ岳のような空気の澄んだところに行くと、数百数千の星が肉眼で見えるようでありますが、たくさんの星があります。ただ、何も知らずに星を見ますと、私もかつて

そうでありましたけれども、「今日はきれいな雲ですね」で終わりなのです。ということは、見てもそれだけですから。電灯がついているのと同じようなものなのですね。ところが、昔の人はここに一つの知恵を出しました。それは星座というものを考えたわけであります。空の星の中で一定の法則をもって動く星のグループがあるということに気がついたわけですね。例えば北斗七星はああいう柄杓型の星が同じ線で結ばれたように、同じグループが同じ関係で一緒に動きます。それから、おうし座とか子羊座とかカシオペア座とか、いろいろ人間は、星と星と同じグループで、同じ法則で動く星を結んで、勝手に線を引いて、星座をつくって、それに名前をつけて、それにストーリーをつけました。そこが偉いところなんですね。伝説をそこにつなぎました。いろいろなストーリーをつけました。そして、それを、その星座図というものを見て空の星を見ると、私どものような素人が見ても、星を見る見方というのが全然変わってくるということに気がつきます。北斗七星というものを私は見分けられるようになりました、あの星座図を見てから。北斗七星の、あの二つの星の延長線上に北極星があるということを知りました。だから北極星はいつも読めます。それ二つを見るだけでも、なんか星空が自分の頭の中で整理されたような気になりまして、星を見るのが楽しくなります。「今日は北斗七星はどこにいるかな」というような、それは時間によってももちろん変わるわけでありますけれども。星空だってそうなんです。

この奈良県のたくさんの方の観光地に、そういう「星座」をつくる必要があります。例えば歴史的な資源だけならどういうように並べればいいのか。奈良時代だけ取ってみれば、どう並ぶのか。万葉集に出てくるものだけを並べればどうなのか。万葉集に出てくる観光資源はすごい数があるわけですから。そういうような観光資源の星座をいくつもつくっていきます。ストーリーをつけます。説明をつけるわけですね。そしてそれを多くの人々に普通に示して情報発信をします。あるいは案内をします。そうすると頭



が整理されてまいります

そういうようなことを考えてまいりますと、新たな観光資源発掘のアイデアがそこに出てくるわけです。それだけのものを持っているわけでありますから。観光資源のネットワークを地元の方々がお作りになられて、それを星座になぞらえ、体系化し、そして情報発信をして、観光客が観光をするときの、それを一つの手引きにします。それがあると観光客が動きやすくなるのです。

端的に言えばモデルコースです。モデルコースというのは、しかし、バランスをとって作るだけでありますから、考え方、ストーリーがあまりありません。ストーリーつきのモデルコース、それをもっともっと観光客が選択をして、自分のコースは自分で選べるような、そういうようなオプションが取れるようなものを作りあげます。これを早くやらないと、奈良の観光というのは非常に多いだけ、余りにも多いだけに、その中の特定の、有名などころだけが見られる、要は、はしより観光になったり、あるいは一部のところ偏った観光になっていきます。すでにそうになっています。この多くの大観光資源をうまく結びつけることにはなりません。従って、大きな交流にそれがつながっていかない恐れがあると思います。これがこれからの課題だと思うところです。

そして観光資源の保全保護も大事でございますし、交通機関の整備も大事でございます。その結果、そこにどういう結論が出てくるかという、観光によるまちづくり。さきほど申し上げましたハードとソフトのまちづくりがどこまでできるか。今日、これからいろいろな発表をされる方々のお話の中にもそれが出てくると思うのでありますが、そういうような観光まちづくり、まちづくりによる観光、それをひとつこれからやっていく必要があるだろうと思います。

まちづくりは地元の方々の参加がなければできません。それが非常に大事なことでありまして、地元の方々がそっぽを向いているとできません。

地元の方々が、奈良は交流都市にならなければいけないのだと、そのためには観光客を呼ばなければいけないのだと、どうしたら観光客を呼べるだろうか、どういう町をつくったらいいだろうかというのを考えさせていただいて、そして、行政当局と一緒に住民の方々がご自分でも参加をして、ソフトのまちづくり、ハードのまちづくりをやっていく。そして、ボランティアでもそうでなくても結構でありますけれども、観光客を温かく迎える一員として、ぜひとも参加をしていただきたい。

私は県民観光、市民観光、あるいは国民観光と申します。すべての人が観光に参加をしなければ観光は成功しないのであります。まず観光客として参加をしていただかなければ、さきほどの1.5回というのは増えないわけですから、観光客として観光に参加をしていただく面が一つ、もう一つはどのような地域でも観光資源はございますから、情報の発信によっては。温かく観光客を迎えることであります。どのようなものが観光客に見てもらうに足りるものかということ、観光客の目線に立って見直していただくことが一番大事ではないかと思えます。

そこで最後に「観光する心」ということを申し上げて終わりたいと思います。「観光する心」と申しますのは、観光客の目線に立って、あらゆるものを見直していこうということでございます。「こんなものは何でもないものだから、もう捨てようか」、「いや、これは観光客が見たら面白いかもしれない」ということで残したために大ブームになったものもあります。国鉄で言いますと、昔の蒸気機関車がそうです。全部つぶそうとしていたんです。そうしたら、古いナンバープレートが盗まれたことが分かりました。盗むということは面白いから盗むんだろうなと思って、あれを残したらお客を呼べるかもしれないと思いました。最後の土壇場で数両の蒸気機関車を残しました。大ブームになりました。警察の警備が必要なくらい観光客が来ます。そういう例があるわけであります。

豊後高田という町が大分県にありますが、ここも氷で冷やす冷蔵庫とい

うのを持っていた魚屋さんがいたそうです。昔はどこにでもございましたね。今ではならまちにもあるかもしれませんが、普通のうちにはありません。あれも「これを残したら面白いかもしれないな」と思って店頭に並べました。そうしたらそれが「まちかど博物館」のきっかけになって、それを見る人が大勢来たというのであります。何でも無いものがそういうようになるわけです。そういうことを考えたら、ここには資源はいっぱいあると思うのです。

そのようなことで、そういう観光する心で身の回りを見直していきます。観光客は観光する心を持って、先ほどの「心を込めて学ぶ」という姿勢で、「心を込めて見る」という姿勢で、敬虔な気持ちで観光していただく、マナーを守って。迎える側はもてなしの心、「よくいらっしやいました」というもてなしの心で温かく観光客を迎える。そうになると、同じ「観光する心」を持った人同士の中にコミュニケーションがそこに生まれます。対話が生れます。観光というのは対話がなければ、地元の人と観光客との対話がなければ、これは文化にはつながってまいりませんから。そこでコミュニケーションをとって、ならまちがそれに近い状態になっていますから、あちらこちらでああいうものをやればいいということだとお考えになればいいと思います。そうすれば、そこに新しい文化が創生発展されるわけであります。観光というのはそこまでいかなければいけません。そのためにはみんなが「観光する心」を持って動いていく。同じ心を持った人同士のコミュニケーションから、観光の輪が広がっていく。そういうふうになれたときにはじめて観光は一つの文化事業になりますし、それが大勢の人が動くことによって経済効果がそこに生まれるようになれば、地域の活性化につながってまいりと思います。

地域格差の問題が言われておりますけれども、従来、この地域格差をうずめてまいりました公共投資というものに限界が出てまいりました。地域格差をうずめ、地域経済を活性化する道具は、ここでも観光しかないのだ

あります。交流人口を増やし、地域の活性化をし、地域格差をうずめていい国をつくるための観光、この原動力が私は奈良ではないかと思います。奈良の将来は、ぜひそういった観光まちづくりをどうするかというところに一つのポイントを当てていただいて、これからも皆様方にもご努力をお願いしたいし、私どももまた皆さまと一緒に努力をしてまいりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

## パネリストからの問題提起

### パネリスト

「奈良の将来」を地域振興行政の観点から考える

高野一樹（奈良県地域振興部地域づくり支援課長）

「奈良の将来」を地域計画論の観点から考える

村田武一郎（奈良県立大学教授）

「奈良の将来」を地域おこしの観点から考える

野村幸治（NPO法人 住民の力理事長）

「奈良の将来」をプロジェクト演習活動の観点から考える

藤井路子（奈良産業大学ビジネス学部准教授）

高野：皆さん、こんにちは。ご丁寧なご紹介ありがとうございます。奈良県の地域振興部地域づくり支援課の高野でございます。今ご紹介いただきましたように、私は地域づくり支援課長と南部振興対策次長と兼ねて仕事をさせていただいております。どうぞよろしく願いたします。

本日、私が奈良の将来の地域振興行政の観点から考えるということで、お話をしてほしいということでお時間をいただきましたので、若干地域行政というと非常に広い分野になってきますが、そういうことから、いろいろ日々仕事の中で考えていることなどを広くお話をさせていただいて、今後この後続きます講演の導入に位置付けられるような話ができれば幸いかと思っております。

今日はどういうことをお話ししようかと思っていたのですが、ま

まず地域振興行政から奈良の将来を考えるということですので、まずは地域振興とは何かということの一つを考えなければならないだろうということと、それから奈良県はそれに基づいて県はどういうことをやっているかということをお話し、最後にそれが奈良の将来を考えるということにつながっていけばいいかなと思っています。

まずはじめに地域振興とは何かということですが、地域振興とはまちづくりとか、地域づくりとか、まちおこしという言い方をされたりもしますが、ただ、明確な定義はないと思っていますし、残念ながらここで今明確に答えがあるということでもございません。ただ、一つはイメージ的なものですが、持っておかなければならないだろうということで、非常に雑ばくで申し訳ないんですけど、まずやはり元気にするということでしょう。そのためには何が必要なのかと考えたときに、にぎわいが必要だと。そのにぎわいを捻出していくためには人が集まるということが大事なのかなと思っています。

昨日、昼休みにちょっとおん祭を見に行ってきたのですが、ものすごい人で、人の中を馬が歩いているような状態がありまして、何だか知らないけれども人が集まっているとワクワクしてくるといっか、元気が出てくる、活力が出てくるということが基本かなと思っています。そういうことが続くにつれて経済も好循環をしていくと、こういう一連の流れというような、漠としていますけれども、このようなイメージを持っていることが重要ではないかと思っています。

それからもう一つは、行政だけではないと思っていますが、忘てはいけない視点というのがあると思ひまして、地域振興を考えるとときには都市部と過疎地域、人口減少が著しい地域、こういうところは必ず分けて考えなければならないかなと思っています。例えば

奈良のことを考えますと、北部の今回1300年祭がありましたけれども、もともとやはり大阪や京都のベッドタウンという位置付けもあると思います。そういうところに観光を活用して、どういうふうにな人が集まる仕掛けというものをつくっていくのかというのがメインになってくるのかなと思っております。

ただ、それにプラスしまして、過疎地域、人口が減少してるところにおいては、暮らし続けられる地域をつくる、基本ですけれども、こういう視点が当然入ってきます。そこに必要になってくるのは、産業振興、これは雇用創出ということが必要になってくると思えますし、それからそもそも医療や福祉という健康面の話、それから消防防災のような安全が必要だと、そういうことも都市部では当たり前にあることがなかなかなかったりします。こういうところをいかに確保していくのかということが非常に重要になってくると思っております。

あと、当然人、過疎地域においても観光なり、交流というのは非常に重要になってくるということですが、そこが若干観光と交流というのを分けて使っているのですが、交流、行き来すること自体が非常に難しいです。交通の面もありますし、距離的な面もありますし、そういうことを重点的に考えていく必要もあるだろうということを考えなければならないと思っております。

こういうイメージと必要な視点ということを考えながら、では、奈良県として地域振興行政というのは、どういうことをやっているのかということをご紹介をしていきたいと思えます。どちらがニワトリでどちらが卵かという話なのですが、基本的にはここでうまく定義できていない地域振興というものも、だいたいこういうものかなというイメージを持つ助けにもなればいかと思います。

地域振興行政というのを語るにあたって、一応組織をご紹介して

おこうと思うのですが、知事をトップにいろいろと部があります。これは県庁の組織で、地域振興部というところに地域づくり支援課とそれから南部振興対策室というのがございまして、私はここにあります。あと文化とか、観光局と同じところにありまして、あとはこの地域振興部には市町村の行政を相手にしているようなところもあるということになっております。こういう地域振興部というのは多くの県で今設置されているところが多いのではないかと思います。

こういうところで私は仕事をしていますが、健康、福祉、医療、それから暮らし、産業雇用とか、農業、林業とか、道路に関する土木とか、こういうものが全部入ってきます。そう考えるとここだけで行ってるということではなくて、全体的に県庁全体でそういう地域振興を行っているという仕組みになっているのだということをご理解いただきたいです。全庁的に取り組んでいく課題、それが地域振興ということで、公共としての県の存在意義といいますか、それだけ地域振興というのは行政目的そのものだといっても過言ではないぐらい重要で、かつ広い分野であるということでご考えております。

これは一応予算を付けております。地域振興費と書いてあるのが先ほどの地域振興部の予算とほぼ同じだと考えてください。全体4,600億ぐらいの予算の中の2.7%、ただ、これも別にこれしか地域振興というのは行ってないということではなくて、全体を取りまとめて地域振興ということだということでご理解いただきたいと思いません。

せっかくですので、全体で行ってるとはいいつつも、われわれ地域振興課でどのようなこと行ってるのかということを順に紹介させていただきます。まずはじめに都市部と過疎地域ですけれども、だいたい左右で、右のほうにいくと過疎地域にちょっと偏ってるかなと、左のほうはどちらかというと都市部に近いかなというバランス



で置いてみるとこのような感じかなと思っております。

まず、ここにあります平城遷都1300年祭、これにつきましては今年非常に盛況で、平城宮跡には363万人訪れていただきまして、非常に大盛況だったと思っております。東アジア地方政府会合、これは国際交流ということ、奈良県というのはイニシアチブを取れるのではないかという思いで、これは県が主催で行ったものですが、地方政府主催の国際会議というのは、なかなか日本では非常に珍しいと思いますけれども、こういうことも行っていました。

それから弥勒プロジェクト、これは今日のテーマに非常に近いのですが、世の中の知を結集して奈良の魅力というか、将来を考えようと、ひいては日本の将来を考えようというプロジェクトをやっています。それから奈良の歴史展示というのがありますが、奈良の価値というのは、先ほども須田様のお話にありましたけれども、やはりグッズはありますけれども歴史自体がうまく表示されてない、理解されていないということがありまして、そういうことをうまく展示していきたいということを行っております。

それから記紀・万葉プロジェクト、これは『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』ですけれども、そういうものをうまく奈良の魅力として活用していきたいという事業です。この右上に過疎方針とありますけれども、これは今年過疎法というのが延長されまして、それに基づいて全庁的な事業を、先ほど言いましたけれども奈良県も市町村もそうですけれども、全県的な事業を取りまとめて体系的に行っていくための事業でございますけれども、こういうものを作っています。

さらに一番下に南部振興、特に今回一番厳しいと思われまして南部についての計画を作るということで、これについては今までの計画、上にある過疎計画と違っていて、具体的に何をするのかと、今まで

の行政の計画という言葉が先走りしてるようなところがあると思っておりますけれども、そうではなくて一つひとつの事業、具体的に何をやるんだというのをきっちり書き込むような計画を作りたいと思ひまして、起爆剤にしたいという意味で作りを始めたもので、今年度中に作ろうと思っております。

基本的にわれわれは何をしてるのかということを紹介いたしました。次に今のようなことを考えながら地域振興とはどういうことかなというイメージを持っていただきたいと思ってお話をしてきたのですが、先ほど申しましたように地域振興というのは奈良の将来というのを考える、行政にとっても大目的というか、目的そのものだと思っております、くしくも県のほうでは今年の4月に奈良の未来を創る5つの構想案ということで、こういう構想案を発表しております。これは当然決まったものではなくて、県としてこういうしていったらいいのではないかとということ案としてお示したもので、今後県民の皆さまと協議、考えていくきっかけ、たたき台のようなもので出したものです。時間の都合上細かい話はできませんけれども、テーマとしてはここにありますように基本的にこの1300年祭の後どういう観光をしていくのか、それからベッドタウンでずっというのかというような施策とか、それから健やかに生きていくものとか、それから奈良に暮らすために高齢者、障害者も含めまして、そういう暮らしについての考え方、それから先ほどちょっとご紹介しました南部振興、南部を元気にするということが載っております。これはホームページに載っておりますのでぜひお時間があつたら見ていただきたいと思ひます。

これを進めるに当たって2つの視点を考えてみました。一つは強みを生かした地域振興ということで、やはり観光、先ほど非常に面白いお話ありましたので、ここで私は言うことはないのですけれど

も、やはり歴史、文化財、それから自然、こういうものをうまく組み合わせた奈良の落ち着いた観光というものをどういうふうに進めていくのかという視点が大事なのではと、一方で先ほど南部の話をいたしましたけれども、近郊のアーケードの発展ということで、インフラも含めまして、どういう交流促進を図っていくのかということを含めて、どうのようによろしく発展していくのかということを考えていかなければなりません。

それからもう一つは、これは当たり前のお話なのですが、地域住民の声を聞くということでございます。今日のテーマである奈良の将来を考えるというのは、当然根本的には住民の暮らしを良くすることだということでありまして、そのためにはやはり政策とす際に立案実施を通して地元の住民と密に意見交換を行うことが不可欠だと思っております。それとともに、本日大学主催ということでこのような会を開いていただいておりますけれども、今は知の最高組織である大学、そういうところも含めて住民の方と大学の知恵とそれから行政でお手伝いできるところと、そういうことを合わせて今後は具体的に何をやるのかということを考えていく場が必要かと思っております。

私からの発表はこれだけになりますけれども、この後もいろいろな発表と議論を非常に楽しみにしております。以上でございます。

村田：ご紹介いただきました村田でございます。よろしくお願ひ致します。

私に与えられたテーマは、「奈良の将来を地域計画論の観点から考える」であります。この地域計画とは、地域の将来の姿を明らかにすること、そこへ至る方策や仕組みを着実に積み重ねていくステップを明らかにすることです。地域計画にあたっては、地域の人々の思いを確実に汲む必要があります。また、地域の方々と一緒に議論していく必要があります。それから、地域の自然条件、社会経済条

件、歴史文化を踏まえること、地域を取り巻く広域や日本全体、世界の動向を的確に把握しておくことが必要です。地域計画は、社会経済計画と物的計画の両方からなるもので、ソフトとハードの両方が含まれたものと思っていただければ幸いです。

以前から、奈良には素晴らしい資源がある、可能性があると言われ続けているのですが、本当にそうなのでしょうか。それは幻想ではないかとも思います。奈良が大阪の植民地としてのうのうとしていた間に、滋賀県ははるか前へ行き、ある分野では和歌山県にも抜かれました。それから、大阪で活躍されていた方々、奈良府民と呼ばれる方々で、多くの方々がリタイアされ、奈良で過ごされる時間が増えたのですが、その人たちを活かす仕組みが何もできていません。知識、ノウハウ、人的ネットワーク、行動力を持たれる方々が奈良へ定着されたという、奈良にとっては大きなチャンスであるにもかかわらず、対応策がとられてきていません。一方、高校生は、県内の大学には進学しません。大学生には、県内での就職先がありません。10年で観光客を減らしたのは、近畿の中では奈良だけです。こうした状況を挙げていけば、きりがありません。

奈良にはポテンシャルがあるというところまでは、私も大いに感じています。ですから、そのポテンシャルをいかに活かしていくかということで、日々県内各地域へ寄せていただいているのですが、なかなか簡単にはコトが進みません。資源・潜在力を活かしながら、社会経済の発展変化に合わせて変わっていかうとする意欲に欠ける、ユデガエル現象に陥っているのが奈良の状況です。

奈良には素晴らしい資源がある、可能性があるという段階で終わらせるわけにはいきません。一人ひとりが問題意識を持って、みんな将来像を共有し、「共働」しつつ、新しい奈良を創り上げていくべき時期に来ていると思います。

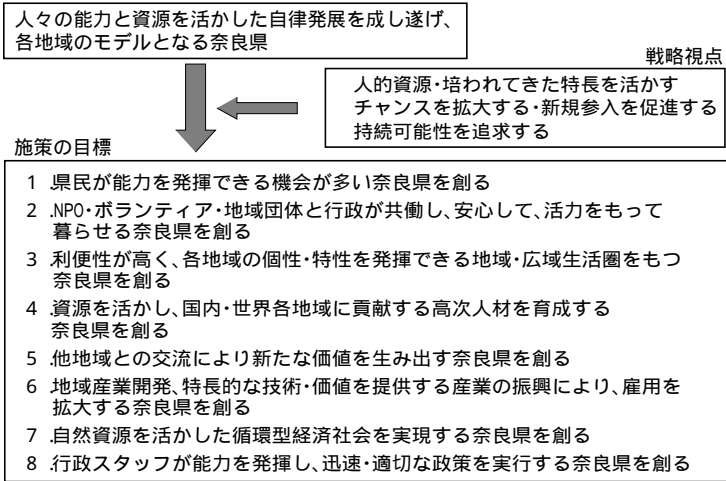


図 奈良県の将来像と施策の目標

そこで、今年の2月、「奈良の将来ビジョンをつくるフォーラム」を県民の方々、研究者の方、産業人の方々とともに設立しました。11月までに14回の総合フォーラムや分科会を開催しました。215名もの会員参加をいただいています。延べ700人の方々の参加、延べ70時間を超える議論を行い、「奈良の将来ビジョン」をとりまとめました。行政のビジョンとは違って、実際に現場にいらっしゃる方、県民の方々の思いをくみ取ったビジョンです。

奈良には、すばらしい能力がある人々が多くいらっしゃると思っています。その人々の能力を活かす仕組みをつくり、また、資源を活かした自律発展を成し遂げて、各地域のモデルとなる奈良県を創り上げることを将来像とする必要があります。

その将来像を実現するために、施策の目標として8点を挙げました。1) 県民が能力を発揮できる機会が多い奈良県をつくる、2) NPO・ボランティア・地域団体と行政が共働し、安心して、活力を

もって暮らせる奈良県を創る、3) 利便性が高く、各地域の個性・特性を發揮できる地域・広域生活圏をもつ奈良県を創る、4) 資源を活かし、国内・世界各地域に貢献する高次人材を育成する奈良県を創る、5) 他地域との交流により新たな価値を生み出し、提供する奈良県を創る、6) 地域産業開発、特長的な技術・価値を提供する産業の振興により、雇用を拡大する奈良県を創る、7) 自然資源を活かした循環型経済社会を実現する奈良県を創る、8) 行政スタッフが能力を發揮し、迅速・適切な政策を実行する奈良県を創る、の8点です。

それぞれの目標ごとに、それをどのように具体化するのかの方針を幾つか入れています。その方針に則り76項目の政策を提案しました。76項目の政策提案の中から特に重要である9項目を、重点プロジェクトとして挙げています。

#### ①盛年（元気なりタイアド層）の社会再参画の促進

奈良府民であった方をはじめとする元気なりタイアド層を、私たちは「盛年」と言っていますが、その方々が奈良という地域社会の中で活躍する条件をきちんとつくっていこうという提案です。社会再参画は、そう簡単ではありません。若いお母さんたちの公園デビューと同じように、長年にわたって活動の場が大阪であった人たちは、コミュニティデビューに問題を抱えています。そういう問題も解消しながら、盛年の能力を發揮してもらおう仕組みづくりを行っていこうというのが、第一の提案です。

#### ②地域委員会の設置

例えば、兵庫県では、5つの県民局ごとに、県民の参画による将来ビジョン委員会がつくられています。それぞれ120人、兵庫県全域で600人の方々が、2年間徹底的に議論します。現在が第5期ですから、合計3,000人の方々が、兵庫県の将来について徹底的に議論して

います。議論だけにとどまらず、そこから出てきた政策は、兵庫県が取り入れていっています。その委員会のOBの方々は、委員会終了後2～3年すると、「あの時あれだけ議論したあれ、我々でもやらないかんのとちがうか」という話が出て、グループをつくって自分たちで動き出されています。そういう状況が生まれてくると、地域は必然的に元気になります。その仕組みを奈良でもつくりたいというのが、この地域委員会の設置です。兵庫県の人口と奈良県の人口を考えますと4対1ですから、奈良県では750人ぐらいの方が当たり前で議論している状況をつくらなければいけません。

#### ③産学官と県民による政策検討委員会の設置

奈良県庁の部・課単位で、将来を考える県民と産学官が参画し、実効性がある政策を立案する政策検討委員会を設置することが望まれます。

#### ④奈良の将来ビジョンをつくるフォーラム会員によるネットワーク型シンクタンクづくり

将来ビジョンをつくるフォーラムには215名の方々が参加をしてくださっています。この方々の知恵を結集して、徹底的に議論し、あるべき方向を見だし、その具体化策を立案するネットワーク型シンクタンクをつくることを考えています。

#### ⑤工芸大学院大学の開設

奈良の最大の資源は、歴史文化資源であります。私たちが注目するのは、その中でも、国宝や重要文化財の建造物が445棟も奈良にあることです。仮に、1年に1棟ずつ改修していっても445年かかってしまいます。その保存・保全をきちんとできる人材を育てる必要があります。これは、世界に対しても人材を供給する拠点になります。奈良は、これまでに培われてきたものをベースに、次の時代に向けての人材を育成していくことが重要な役割ではないかと考えて

います。

⑥地域資源を活かす新観光・交流産業の開発・振興

従来から、奈良の観光は、見に来る、鑑賞に来るもので、奈良の人々は、来訪者と何もかかわっていないという状況です。この観光の状況は、もう続かないのではないのでしょうか。奈良は、毎年同じ映画を上映している映画館のようなものであると言っても良いかと思いますが、毎年同じ映画を見に来てくれる人の数はどんどん減っていくでしょう。人とのかかわり、交流を中心にした観光を振興していく必要があります。従来からのマストツーリズムをやめると言っているわけではありません。従来型観光には頑張り続けてもらわなければなりません、その低下には歯止めがかからないはずですから、もう一つの観光（オルタナティブツーリズム）を組み立てていく必要があります。その時に、グリーンツーリズム、工房ツーリズム、林業ツーリズム、ラーニングツーリズム、やすらぎツーリズム、食文化ツーリズム、産業ツーリズムなどが、奈良で可能性があります。奈良の人々が主体的に、従来の奈良では見過ごされてきた「観光・交流」にかかわるサービスをつくっていくことが必要です。

⑦観光・交流支援機構－外国人旅行者（インバウンド）の奈良来訪の促進と交流

特に外国人の方々に対しての情報発信とプログラムの提供ができていません。来てくださった方々をコーディネート、お世話をする仕組みもできていません。外国人旅行者の奈良来訪の促進と交流の仕組みをつくっていく必要があります。

⑧奈良の産学官の総力を結集した産業ビジョンの策定と実施

奈良の産業の弱点を克服し発展への道筋を明らかにすることはもとより、奈良の資源を徹底的に活用する新産業を創出する必要があります。このため、産学官の総力を結集した産業ビジョンの策定と



実施が重要です。大阪の高次産業機能に依存しているだけではなく、奈良の良いところを活かしていく必要があります。例えば、奈良へ来てくださるお客さまの嗜好、思い、これも奈良の産業にとっての大きな資源であるという認識が必要です。

#### ⑨地域資源を活かした新商品づくり支援機構の設立

奈良の産業振興の具体化例のひとつが、新商品づくり支援機構の設立です。これは、既に組織づくりに向けて動いています。奈良へ来て食べても食べるものがない、買う土産物がなかった、こういう話をよく聞きます。来てくれている人たちの嗜好や思い、あるいはセンスに合うような商品の開発ができていないということです。簡単な数字を申し上げます。毎年、約3,500万人の方々々が奈良へ来てくださっていますが、ほとんどは日帰りです。このの方々々が奈良で使われるお金は3,500円程度しかありません。京都の場合は7,100円を使ってくれます。神戸では7,900円を使ってもらっています。仮に奈良の土産物屋や飲食店で1,000円余分に使ってもらえれば、これだけで350億円というすごい数字になります。そういう市場が目の前にありながら、これにきちんと対応していません。地域資源を活かした新商品づくりを支援する機構によって、ひとつでも、二つでも、奈良の固有性を生かした新しい商品をつくり出していく必要があると思っの提案です。

今後、私たちは、奈良の将来ビジョンの具体化に向けての活動を進めていきます。それから、県庁の方々とも「共働」をしていきたいと考えています。今後とも皆さまのご支援をよろしくお願いを申し上げます。どうもありがとうございます。

野村：こんにちは。高取町の野村です。ボランティアで地域おこしの活動を行ってる事例を紹介しながら、地域振興の観点から奈良の将来を考えてみたいと思います。少子高齢化社会を迎えたこれからの地域

社会では、地域活力の維持のため、また高齢者自身の生きがいのためにも経験豊かなシニア世代がボランティア活動により地域を支える主体となつてまちづくりを進めていくことが期待されています。高取町ではシニア住民の主導でまちなみの景観や伝統文化とシニア住民のもてなしを生かした観光交流地域と居住福祉地域の創出を目指して取り組みを始めています。

次にシニア世代について少し考えてみます。昭和5年から昭和25年まで、年でいいますと60歳から80歳の世代は、成人になったときには同胞の血を流さずに民主主義国家や農地解放ができておりまして、地方は江戸時代から培われてきた教養の時代が続いていました。また石油に代表される化石燃料が廉価で使用できました。そういうことで高度経済成長の波に乗りまして、GDPの拡大が雇用者所得の増加につながりました。ほとんどの国民が飢えの恐怖から解放されたというのが昭和30年ごろだと思えます。

今日より明日が信じられ、未来が輝いておりました。収入も年々増え、マイホームも持て、定年退職すれば退職金がもらえ、年金がもらえます。私も今年金生活をしております。戦後40年が経ち、バブル崩壊が始まりまして、それにつれていろいろな分野で綻びや軋みが出てきました。明日はどうなるのか。この国の将来が見えなくなり、明日への希望が持てなくなりました。そしてその打撃を一番被ったのは地方です。山や川や田畑や海、商店、そして教育などが荒廃し、その総和である国が荒廃してしまいました。歴史の恩恵を受けたわれわれ世代が自覚してリタイア後の人生をささげて荒廃したふるさとを再生する責務があると思えます。高取町の取り組みはその実験です。

シニア世代の構造変化が起きております。貧しい、弱い、寝たきり老人、痴呆症等々の社会的弱者から、今や健康で元気、時間的、

経済的ゆとりがあり、経験が豊富、人的ネットワークなど持っている社会的強者に構造が変化しつつあります。個人金融資産1,400兆円とよくいわれてますけれども、この大半はこの世代が持っております。また新しいもの好き、高い教育水準、自立・自律二つの自立志向を踏まえた団塊の世代の参入も始まっております。

シニアは埋蔵金です。地中にお宝は眠っています。奈良県の総人口142万のうち高齢者人口は33万、1万人に1人でも目的、使命、戦略を考え、責任感を持って行動できるシニアを発掘すれば、奈良県は変わると思います。NPO等住民の主体的な活動を支援する体制づくりを県や国にお願いしたいと思います。一つは自ら地域の諸問題を分析して、自分の活動分野を選択し、目的、使命、戦略を考え、責任感を持って行動するシニアの発掘であり、もう一つは活動の継続性を確保するための、そういう方たちへの資金等の支援であります。そしてもう一つ、Uターンの促進、これは江戸末期に行われた天保の改革の一つに人返しの法というのがあります。これに習ってリタイア後も東京に住み着いている奈良県出身者にふるさと再生のためにUターンを促すということも必要になってくるのではないかと思います。

それでは高取町の取り組みについて説明してまいります。まず高取町の現状分析をいたしました。内部と外部に分けて弱み、強みを分析しました。弱みとしましては、唯一の産業である売薬、製薬は衰退の一途をたどっている等々です。強みは、住民の高齢化が進んでいて、高齢化は30%になりました。この高齢化30%を弱みとみるか、強みとみるかで全然物事は変わってくると思います。私は強みとみております。街なみは城下町の景観がよく残ってる等々です。外部的な弱みは町財政は破綻の一步手前で財政再建が緊急課題であるということです。強みは行政には多くを期待できないことが住民

に浸透してきており、住民の自立意識が芽生えてきているということです。

それでは天の川計画のコンセプトですけれども、近きもの喜び遠きもの来ると何か論語にあるらしいですけれども、土佐街なみを天の川に見立てて、住民が天の川のお星さんになって輝く。地元の住民がユニークで大変楽しそうに生活している地域には外部から人が集まるだろうと、こういうことで天の川計画を立てています。

観光の潮流は歴史文化を見て回る観光から地域住民と交流する観光へ変化してきております。ポスト1300年祭の奈良県の観光振興策は来訪者が中南部まで足を伸ばして住民と交流体験ができる観光へと転換を図る必要があるのではないかと思います。そうすることによって奈良県での宿泊の増加につながります。観光交流地域とは、地元住民が観光客との交流を楽しんで、積極的に行うことにより、住民が郷土に誇りを持ち、来訪者が何度でも訪ねたくなるような住民が光り輝いている地域です。観光を地域の総合産業として住民が主体的に振興することが地域経済の活性化に大きく寄与し、地域が持続的に発展する原動力になると思われます。観光は産業としてだけではなく、地域おこし、まちおこしにおいても多大な効果があります。

高取町は古代より国道169号線が開通する昭和30年代までは、吉野の玄関口としてにぎわっておりました。今後は南部振興の起爆剤となるように頑張ってやっていきたいと考えております。

天の川計画の基本理念は、役場に何かを求める前に住民一人ひとりが地域に何ができるかを考え実践することです。目的は観光交流人口を増やして、一つは地域の活性化にぎわい再生と、もう一つはシニア住民の心身機能の活性化を図ることです。使命は、一つは旧城下町の景観とシニア住民のもてなしを活かし、シニア住民がこれ

まで培ってきた経験、知恵、技術、人的ネットワークや地域への思いなどを結集して、魅力あふれる観光交流地域の創出であります。もう一つは住民の健康や生きがいを育くみ、地域社会で安心して生きるための装置として機能している社会的文化的な居住福祉地域の創出です。

顧客は都会の熟年女性に絞り込みました。戦略は、一つは城下町の背景としての高取町の再現、二つ目は四季折々のイベントの開催、冬の町家の雛めぐり、春の端午の節句まつり、夏の風鈴と七夕まつり、秋の町家のかかし巡り等々を行っております。もう一つは月替わりのギャラリー、これも女性の喜ぶ手芸工芸品に特化して月替わりギャラリーを開催しております。

では取り組みの事例としまして、一つは日本一の山城高取城のCGによる再現ですけれども、一般的には物事は需給、イコールお金で動きます。われわれはボランティアですのでお金は1円もありません。どうやったら動くか。大学のボランティア団体との協働によって需給イコールお互いのニーズの合致を探すことによって動くのではないかと考えました。大学のニーズは、多くの方に大学を知ってもらって学生数を確保したい等々であります。学生は実践的な学習がしたい。そして就職活動のときに客観的に自己PRをしたい。ボランティア団体は高取城を再現したい。ニーズの合致はマスコミに取り上げられることです。

これが完成しました静止画像、日本一の高取城、こちらが天守閣周辺、これが先ほど動画が動くつもりだったのですけれども、私のやり方がまずくて、動画も完成しております。それでこのプロジェクトをまず発足するときに新聞全紙に載せていただいた、これは朝日新聞の記事です。次に静止画像が完成したときには、朝日新聞は全国版に載りました。あとは奈良版ですけれども、他の新聞全部に載

せてもらっています。そして今度動画が完成したときにも全紙に掲載していただいています。その後、この奈良産業大学さんのCGによるいろいろなプロジェクトができてまして、2007年から2009年には3年間かけて藤原京のCGが完成しまして、もうすでに今皆さんに見ていただいています。また今年2010年には大和郡山城のCG再現プロジェクトが発足しております。

次の取り組み事例は、旧城下町の景観とシニア住民のもてなしを生かした町家の雛めぐりイベントの開催です。左上はメイン会場の天段の雛、右上は民家のひな人形、左下はメイン会場で毎日お客さんに説明している住民スタッフ、右下は住民の方が毎日自宅で観光客に説明されているシーンです。ひな人形を介して観光客と住民とで思い出話を花を咲かせてもらおうというのが、この町家の雛めぐりです。

ちょっと紹介しますと、浜辺のひな祭り、これはお客さんの中でひな人形を見て涙されている方がおられ、その家の方が「どうされたのか」と聞かれたら、「自分が幼いときは戦争中でひな祭りなどする世相ではなかったが、母が3月3日に私を浜辺に連れて行ってくれ、戦争中でなかったら家でひな祭りをしてあげられたが、今はできないので、きょうはこの浜辺であなたと二人のひな祭りですと言って、お重いっばいのごちそうでひな祭りを祝ってくれた、その思い出が、今ここの家でひな人形を見せていただいてよみがえり、亡き母の優しさや恋しさで自然と涙があふれてきて失態を見せてしまいました」ということで、それを聞かれたその家のお母さんももらい泣きすると、こういうシーンがあちこちで生まれております。

町家の雛めぐりの観光客の方の感想を少し紹介しますと、「昨年大変素晴らしかったので今年は友人を連れて一回、息子夫婦や孫を

連れて一回来ました。毎年来ていますが、何度来ても楽しく、町はきれいで、町の人たちは親切で、また来たいと思わせてくれます。31日間大変だと思います。雛の保管も大変だと思います。頑張ってください。」と観光客の皆さんもボランティアでやっているのがお分かりいただいています。「雛の数、説明、まちなみのきれいさ、町の人々の親切な対応、すべてに感動しました」等々、住民との交流を大変喜んでいただいております。

雛めぐりの数字ですけれども、平成19年に第1回観光客が8,151人、今年が4万9,100人、経済効果は高取の町で使われたお金も当初1,600万が、今年は8,900万、雛を飾る家も当初36軒が今年90軒になりました。来年は100軒にはなると思います。そして運営をボランティアで支えていただいている住民の方が延べ420人が、今年3,988人、もう町上げての1ヶ月間のイベントになっております。

それから次に3番目の事例、町家のかかし巡りのイベントの開催ですけれども、左上は結納のシーンをかかしで再現しております。右上はおばあちゃんとお孫さんをかかしで再現しています。左下はメイン会場、これは二十四の瞳のシーンです。そして右下は住民とかかしと観光客のシーンです。去年第1回町家の案山子めぐりやりました、11月1日から30日、1ヶ月間で6,183人の方が来ていただきました。観光客の方の感想をちょっと紹介しますと、「民家や店先にふといるかかしは楽しい。畑に座っているかかしなど本物と見違うほど、二十四の瞳のセットも素晴らしかった。キャラクターもののかかしは孫を連れて来たいと思います」等々、皆さん楽しんでいただいております。

次に、取り組み事例4としましては、月替わりギャラリーの開催ですけれども、左上は町家を改修してギャラリーをつくりました。これは皆さんから寄付金をいただいて、県と国とで補助金をいた

いて作ったギャラリーです。右上はお客さまがそのギャラリーを見ていらっしゃる。左下もお客さまで、ほとんど女性の方です。熟年女性の方です。右下は作家さんとお客さまがお話をされてる風景です。10月やりましたミニチュアクレイアートのお客さまの感想をちょっとこれも紹介しますと、「懐かしいまちなみの中でのギャラリー、とても楽しかったです。ゆったりと味わいのある作品により時間を過ごせました。この機会を生かして手芸にも関心を持ってみたいと思います」。「あまりにかわいかったので、友人を連れて一回、孫夫婦を連れて一回、別の友人を連れて一回、今月だけでもう4回も来てしまいました。何度見ても見飽きません」等々、だいたいリピーターが半分です。昨年10月にこの町家のギャラリーはオープンしました。月間だいたい1,000人から1,500人ぐらいの来館数があります。そのうち半分はリピーター客です。

等々の結果、観光交流客の推移ですけれども、平成12年に7,075人だったのが、17年が9,670人、18年1万9,000、19年3万7,000、20年4万9,000、21年今年の3月までで7万というふうに観光交流客数も増えております。

今後の観光振興についてですが、地域の活性化には通年の集客能力の向上を図ることが重要なキーになります。3月だけ来ても駄目なのです。2007年の規制緩和により第3種旅行業者を取得すれば地域での募集型企画旅行業が可能となっています。地元ならではの情報収集力と企画力を生かし、行政の垣根を取り外して、高取町はもとより県南部の観光資源と住民のもてなしをつなげて、四季折々の交流体験プログラムを組成し、集客能力の飛躍的な向上を図って、新たな着地型観光の振興を展開してまいりたいと思っております。これで私からの説明を終わります。どうもありがとうございました。

藤井：ご紹介にあずかりました、奈良産業大学ビジネス学部の藤井と申し



ます。先の方々とは異なり、私は奈良県全体にかかわる活動に携わっているわけではありません。唯一の地域との接点がこのプロジェクト演習、地域貢献プロジェクトと申しますが、これが小さな窓になっています。この小さな窓から奈良県を眺めていますので、あるいは視点が若干ほかの方より偏っている可能性がなきにしもあらずですが、その小さな窓から眺めた感想と、奈良県全体に対する思いを聞いていただけたらと思います。よろしく願いいたします。

本学のプロジェクト演習は、実践スタイルの授業、あるいは実際の現場見学などを積極的に取り入れ、興味ある分野を深く掘り下げて学ぶものです。それぞれの学部いくつかのプロジェクトが立ち上がっておりますが、ここでは私が担当しております地域貢献プロジェクトに絞ってお話をさせていただきます。

地域貢献プロジェクトの活動の柱は、二つあります。一つが菜の花プロジェクト、そして農園体験です。

このうち農園体験は、農業という産業が直面している問題、あるいは将来への展望を、実際の作業体験を交えながら現場の人々から聞こうというものです。もちろん通常のゼミナールでも同様のヒアリング調査は行われます。農園に調査に出掛けて、農産物価格の低迷に悩む声を現場の方から聞いた後、コスト努力を払って価格の低下に耐える体質をつくるべきか、それとも、よいものにはそれ相応の対価を払う消費者にターゲットを絞り込んでいくべきなのか、あるいはそういう選択の鍵となるのは何か、ということを経験や資料を前にして議論することになると思われます。

けれどもプロジェクト演習は、実体験の中から生まれた問題意識を持って講義に臨み、知識を得るところに特徴があります。したがって同じ農業問題を取り上げるにしても、まずは生産、販売、さらには運営全体について自ら体験し、考えるところから始まります。そ

うした位置付けにあるのが地域貢献プロジェクト版菜の花プロジェクトです。

このプロジェクトでは、天理市柳本町にある休耕地で栽培して搾油したなたねを、販売しております。

ところで、地域貢献と聞くと、いわゆる奉仕活動やボランティア活動をイメージされるようで、なぜ販売するのだということをおっしゃる方もおられます。もちろん見返りを求めない奉仕活動、あるいは貢献活動は、尊いものですが、私たちは大学のゼミナールとして取り組むにあたって、この活動を地域活性化につながる活動を模索して提示していくことを課題とする場としてとらえています。

そうはいいまでも、活性化という言葉自体が具体的なイメージを浮かべにくいものです。もともと科学、あるいは生物、医学という分野で使われていた言葉で、使われていなかったものに刺激を与えてやることによって反応性や機能を高めることを意味するそうです。それが地域振興などの分野で組織、あるいは地域活動を活発化することを指すようになったと聞いています。

例えば地域内外の人、モノ、情報の交流機会を増やす。地域資源の発掘・育成、そして地域産業の振興など、活性化には様々な形があります。

そうした中で私たちが取り組んでいるのは休耕地という遊休資源を利用して、実りをもたらす活動です。ここでいう「実り」には実際の収穫物だけではなく、景観形成という副産物も含まれます。

休耕地周辺には長岳寺や崇神天皇陵、黒塚古墳などの史跡が多くあります。また桜井市から天理市に至る山の辺の道はハイキングコースとして人気があり、季節を問わず人の通りが多くあるところですが、ところがそういう地域資源に恵まれながら、後継者の不足によって、荒れたままの状態になっている田畑やその予備軍がたくさんあり、

景観上も問題になっているそうです。もちろん、私たちは、この地域の景観形成を活動目的としているわけではありませんが、派生効果として、畑を埋めつくす黄色い花が、訪れる人々の目を楽しませてくれます。

しかしながらこれはあくまで大学のゼミナール活動の副産物であり、休耕地増加とそれに伴う景観悪化が根本的に解決されるわけではありません。さらに、大学は基本的に教育研究機関ですから、ゼミナール活動にしても、地域のニーズより学生の興味・関心が優先されます。つまり休耕地解消には地域農家および住民の参加が不可欠なのです。したがって、私たちが地域貢献プロジェクトとして模索するのは、それを誘発するもの、あるいは仕組みです。

1971年の自由化以降、菜種の栽培は減少を続け、自給率は1%未満にまで落ち込みました。しかしながらナタネそのものは省力作物ですから、ある程度の収益が確保されるのであれば、休耕地を抱える農家、あるいは周辺住民による栽培参加を得やすいのではないのでしょうか。そうした考えから、私たちは、収穫したナタネを搾った菜種油を地域の特産品へ育てていくことを目標に掲げています。

そうはいつても地域貢献をうたいつつ、他の支えなしでは活動が維持できないというのでは本末転倒です。そのため、できるだけ自立した歩みができるようにならないといけないと考えています。活動を支えるのは資金ですが、現在の販売価格で活動費をすべてカバーするには、今年の約1.5倍、販売価格を上げた場合は、650円で1.4倍、700円で1.2倍の収穫アップが必要です。ただ、これらは完売を前提とした計算です。単純に価格を引き上げた場合、割高感を覚えて購入をやめる人が多いのではないのでしょうか。

市場で取引されるモノの値段は、消費者がその財に対して認めた価値だとすると、消費者が価値を認めてくれるのであれば700円でも

売れるはずですが、そこでこの商品の価値を見直し、効果的な方法で発信する必要があります。

しかしながら、価値を見直し、見せ方に工夫をしながらアピールしてもなお購入をためらう消費者は多いと思われます。そこでさらに、この活動の意義まで立ち返って見たのがこちらです。

菜の花プロジェクトは滋賀県愛東町でスタートした活動で、廃食油を回収してバイオディーゼル燃料へと精製加工して、地域内で利用する活動が始まりです。ここからさらに発展して、休耕地で栽培したナタネを加工し、絞りを肥料や飼料として再利用し、食用油は地域の中で消費するという、一種の資源循環型社会が形成されています。

この活動を手本にして、菜の花プロジェクトに取り組む地域や活動団体は多いものの、この資源循環サイクルを構成する個々の活動全てに取り組んでいるのかというと、そうではありません。私たちが取り組んでいるのも、菜の花の栽培、菜種の収穫、そして絞った菜種油を販売するという部分だけであり、生産、加工、販売という、単純な流れにすぎません。

ところがここで廃油の回収とバイオディーゼル燃料の精製、そして利用活動に取り組むNPOと協働することによって、全体として資源循環サイクルが形成され、単なる生産活動ではなく、環境活動という側面が出てきます。言い換えると、協働によって新しい価値が付加されるわけです。

環境活動の中から生み出される生産物として菜種油をとらえ直すのであれば、別の運営方法も考えられます。例えば、菜の花プロジェクトに取り組む多くの活動団体で採用されている菜の花サポーター制度は、活動を応援する人々から会費をいただく代わりに、菜摘や収穫体験の機会や、搾った菜種油を提供するシステムです。会員は、

部分的ではありますが、こういう活動にかかわることで、環境活動に貢献しているというある種の満足感を得ることができるわけです。つまりここで支払われる会費は、活動に関わることによって得られる満足感に対する対価だと解釈することができます。これを私たちの活動に当てはめるのであれば、環境活動に関心がある消費者にターゲットを絞り込み、環境への貢献という側面から商品をアピールするということになるのですが、最初に触れましたように、相応の対価を支払う用意のあるごく少数の人にターゲットを絞り込むほうがいいのか、それとももっとより広い範囲の人々にアピールするほうがいいのかは今のところ私たちもまったく判断できておりません。これは今後の課題です。

そうしたことを宿題にしながらも、とにかく一定の収益（活動資金）を得なければなりません。そこで次に、収益を獲得するチャンスを増やそうと考え、菜種が刈り取られる6月から次の植付けまでの間にソバを植えることにしました。

収穫したソバの実を加工してオリジナルブランド商品ができないかということを考えてわけですが、残念ながら今年（2010年）は猛暑の影響と私たち自身の技術不足のため十分な収穫量が得られず、地域住民を招いてそば打ち体験教室を開くのが精いっぱいでした。収穫獲得機会を増やすという意味でいえば、失敗したと言わざるをえませんが、それでも交流機会の創出という意味で、地域貢献にはなったのでしよう。

休耕地を利用して景観形成と育てた菜種を使った菜種油の特産品化を目指す地域貢献プロジェクト版菜の花プロジェクトですが、ここに収益獲得機会の拡大を目的とした蕎麦の栽培を組み合わせることによって、連作障害回避と夏から秋の雑草対策、景観形成、そして近隣住民との交流機会の創出、そして収穫したソバの実を使った

オリジナルブランド商品誕生の可能性が出てきます。さらに今後、刈り取った草を堆肥化する活動を加えることで環境活動という価値を高めていくことも考えられます。

このようにいくつかのプロジェクトを組み合わせることによって、より大きな価値、あるいは新しい価値というものを生み出すチャンスが生まれます。例えば協働いただいているNPOが行っておられる活動と、その周辺の活動で考えるなら、菜種の栽培・収穫と家庭生ごみの堆肥化活動を結び付ける、あるいは収穫した菜種と回収した廃食油からバイオディーゼル燃料を精製するとともに、利用範囲を広げていくことができるでしょう。

こういう一つひとつのプロジェクトを後押しすることと同時に、ある計画性をもってこれらをうまく組み合わせることでやることによって新しい力がどんどん生まれてくると信じます。奈良県に対して望みますのは、県内各地にある小さな活動を戦略的に結び付け、より大きな力にしていっていただきたいということです。ご清聴ありがとうございました。

## パネルディスカッション

コーディネーター 野 口 隆

(奈良産業大学地域公共学総合研究所教授)

野口：ご紹介にあずかりました野口でございます。よろしくお願ひいたします。今、後ろの方ともやりとりしておりましたが、時間が非常に切迫しております。予定よりだいぶ前半が長くなってしまいました。

皆さまの会場からのご質問にきちんとお答えし、かつパネリストの方々のそれぞれの意見について互いが意見交換をし合うと、これが本来のパネルディスカッションのやり方だと思うのですが、なかなか時間が切迫して難しくなっていました。そこのところをできるだけ努力したいと思いますので、皆さまよろしくお願ひいたします。

では、進め方ですけれども、最初は皆さまから質問をいっぱいいただいておりますので、これを簡単に少し紹介いたします。その後パネリストの方々、順番にその質問に答えるということを含みつつ、先ほどのご提案で言い足らなかったところを述べていただけたらと思います。

ご質問はいっぱいありまして、舞台裏で整理しているうちに時間が来たというのが現実なのですが、まず全体に共通しているようなもので、それで、ここで議論していただくことはどうかと思いますが、話としてはお答えしなければならないというのはあるかと思ひます。まず、南部という場合にどこを指しているのかというのが、

後でちょっとお答えください。高野さん。全体に共通する話としては、もう私が答えてしまうのが少しあります。

例えば「県がいろいろなビジョンを作っておられるのですけれども、知事さんが替わったら前のビジョンはどうなるのか」という話があります。公式的には知りませんが、前のビジョンはないがしろにされていることが、他府県の例を見ても非常に多いというように私から答えておきます。

それから、各先生方共通でどなたか、須田先生、それから村田さんにはぜひお答え願いたいと思いますが、「奈良県のこれからの観光のターゲットは誰が」という質問が出てきます。それから、村田先生に「ネットワーク型のシンクタンクの活動に参加するにはどうしたらいいか」というような質問が来ていますが、これは将来ビジョンのフォーラム、ホームページに絶対に載るとしますので、それを楽しみに待っていてくださいというようにお答えしておきます。

野村さんには「観光客にリピートの数を含んでいますか」というものです。これは、リピーター含んでいますね。はい。だから、同じ人が2回来られたら2人と数えております、ということです。以上が全体的な質問です。

次に、個人への質問をまとめて紹介します。

リニア中央新幹線の影響について、まず須田先生からなのですが、「リニア新幹線について」とあるのですが、これは非常に先の話ですので、もう少し時間をおいていいかと思います。

それから、須田先生には奈良の交通ですね。これが先ほどの話で交通網としては、鉄道のネットワークは私はあるとは思いますが、「JRと近鉄とトータルで見た場合に交通網が有効に機能しているかどうか」ということについては、質問者も疑問を持っておられま



す。私もちょっとそういう点を感じますので、将来どうしていったらいいのかお話しください。

その次ですが、村田先生に対するご質問で、一番重要なお質問としては、「NPO、ボランティア、あるいは地域団体として行政が、質問者の見解によれば、必ずしもまだ共働できていないのではないかと、住民と。どうしていったら良いでしょうか」というようなご質問があります。

それから、「普通よそで見ているとボランティアとかNPOの中には民間発もあるけれども、行政の活動から生まれているものもある。なので、それは奈良県には少ないのではないかと」というご意見がありました。

それから、あと村田先生がご紹介なさった「ビジョンの中の医療介護サービスの質的向上とか、地域の課題にもう少し答えていない」ということがございます。これは、お断りをまた指摘してください。

それから、これは須田先生と村田先生ですかね。「奈良の市内の中心部でも夜の終わりが非常に早い。お客が夜楽しめないけれどもどうしたものか」という質問があります。

野村さんに対しての質問で一番多いのは、「地域の人たちをよくあのよう動かされた。どういうふうにしたらあのようみんなが生き生きと動くようになったのでしょうか。立ち上げのときに苦労されたでしょうね」という質問がいくつかまいております。

「交通の便が非常に不便なところでよくやっておられた。感心です」というのが来ています。これはとにかく不便でも何でも1ヶ月に5万人来ておられるということが、要するに交通、それほど交通不便ということでもないですね。それもありますけれど、回答になっているかどうか。

それから、個人の質問では、もう一つむづかしい質問が入ってお

りますけれども、高野課長にですが、「都市と農村の交流を軸としていく場合、地域振興部の活動も非常に大事なのだけれども、農林部とか土木部との連動が不可欠とあります。これが具体的にはどのように交渉されていますでしょうか」という質問がありました。それから、さらに奈良県南部というと紀伊半島の中心なのですね。という点では、「和歌山県とか三重県との連携も必要だけれども、どういうふうになさっているのですか」という質問がありました。さらに、「行政と住民との密接な意見交換というのは具体的にどうするのですか」という質問です。

以上、なかなか厳しいご質問がいっぱい出ておりますが、それでは、まず須田先生からお願いします。

須田：それでは、今、野口先生からお話がありましたようなことで、2点あったと思います。リニアはちょっと先ほどおっしゃいましたから、それを除いて。奈良の交通について、その課題は何だろうかという話の一つ。もう一つは奈良の夜ですね。奈良の夜が非常に寂しいのではないかというお話で、奈良の夜をどうしたらいいのか、その二つをちょっとお話ししてみたいと思います。

最初でございますが、私が奈良の交通にはご指摘な面が確かにあると思います。ただ、全体的な輸送密度と申しますか、面積あたりの鉄道の延長というのは、さきほども申し上げましたように、全国でまれに見るほど、とくに県中北部は密度の高いところであります。奈良の方々に実感としてそれがあまり便利でないということになるということはどういうことかと言いますと、二つ問題があると思います。

一つは、ここの交通機関が大阪中心にできているということです。大阪のほうからできてきた。近鉄も「大軌」と言いましたけど、大阪電気軌道というのでお分かりのように、大阪の郊外電車として、

大阪中心にできてきたのでありまして、奈良を中心にしてできた交通機関ではないということです。これがやはり奈良の方からご覧になると、若干地元の交通機関としては問題なところがあったというのが一つです。

もう一つは、交通機関同士の競争が非常に激しいところでございますから。例えば、京都奈良間でも近鉄とJR、大阪との間でも近鉄とJR、近鉄の本線は3本あるわけですが、それぞれみんなJRと絡みがあるということでございますので、交通機関の競争ということも交通機関が非常に意識をいたしまして、住民というよりもむしろ観光客とその他のいわゆる比較的足の長いお客さんを競争して、いかにうまく取るかということ念頭に置いて作ってきたというところがございます。

従いまして、どちらかというとなんかそういうようなところに重点がございますから、地域の方々の日常の足としてみた場合には不十分なところがあります。この2点だと思います。それで、これを改善するにはどうしたらいいかということでございますけれども、一つは今の大阪中心の交通機関を奈良中心の交通機関に移していかなければなりません。何とか競争だけを考えずに、住民の足としての機能、観光地の足としての機能両方を果たしてもらわなければいけません。

こう考えてまいりますと、私はこれからのあり方といたしましては、交通機関の相互補完と申しますかね。従来の競争だけではなしに、もっと競争の上に立って、一段上に立ってお互いに相手のないところを補い合うと、連携し合って補い合うと。ある意味においては連携するというようなことで、交通機関のネットワークというものも連携によって相互補完機能のほうへ変えていく。急には無理かもしれませんが、少しずつそういう方向へ持っていかなければならないと思います。例えば、駐車場を作って、もっと自動車やバスと

の連携をうまくやるとか、奈良県には空港がございませんが、関空、伊丹などの空港アクセスを便利にするにはどのようにしたらいいのかとか、そういうようなことを考えながら、近鉄とJR、さらにバス、タクシー等がもっとうまくお互いにダイヤを補完し合って補い合っていけば、地元の方々にも観光客の便利な足になると思います。

そうやって、やはり皆さま方の世論といいますか、そういう声が大事だと思うのでございます。何とかそういうような意味合いで地元の交通機関になるために点と線の交通機関が面になるためのそれぞれの交通機関の連携、競争から脱皮して相互補完関係になるような新しい交通体系を作るという観点に立ちまして、今のネットワークをもう一度考え直してみる。使い方によってソフトな面で、あるいは便利な切符を作るとか、駐車場を作るとか、いろいろあると思いますので、そのような工夫があれば私は変わっていくと思います

2番目の奈良を中心とした夜の問題でございますが、これは私は確かにそうだと思いますが、二つ原因があると思います。一つは、観光客の方々で奈良に泊まる人が少ないことです。大阪、京都から日帰りの観光地として大変便利なものがあるので、大阪から来た人は夜になると、大阪に帰ってしまってここにはいません。奈良へ来たよそからの観光の方々は、ここで一定の観光コースを回ったら、あとは京都に行って京都に泊まると。そういうような方が非常に多いので、夜はみんなこの観光地は静かになって、おうちに帰るか京都に行って寝ているわけであります。従って、どうしても夜のにぎわいがありません。どうしたらいいかということは、これは泊まってもらうしかないわけですね。

さきほど申し上げましたように、あらゆる観光資源があるわけがありますから、これは住民の皆さま方がご自分の身の回りを見回していただくことから始まると思いますけれども、観光資源をもっと

棚卸しをされて、情報を出されて、ストーリーも付けて、システム化をして、やはりこの辺の観光地を、もっともっと観光資源をたくさん提案する。それに先ほど言ったように星座のようにしながら、分かりやすい説明をしていくということをやって、観光資源を増やせばここに泊まらざるをえなくなるわけでありませう。

南部のお話がありましたけれど、奈良市付近だけ定番コースで、あるいは夜は京都へ行くことしかないわけですから、南のほうにまわれどこかへ泊まらなければいけないわけですね。長期滞在型の観光地にここをするための工夫、またお客さんを引き止める努力、それがあれば夜ここに観光客は泊まります。では、その場合は何をしたらいいのでしょうか。夜の演出を考えるわけです。

例えば、夜歩けば楽しいような、例えば京都に最近花灯路っていうものがありまして、道端にあんどんのようなもので夜になるとそれが非常に情緒的でいいというので有名になっているわけですが、何十万というお客が出たそうです。例えばそのようなものを考えると、例えば奈良公園でも夜間の照明のやり方を工夫するとか。有名な観光資源のライトアップをやってらっしゃると思いますけれども、もっと工夫をするとか、いろいろなことをやって、今の観光資源に付加価値を夜も付ける。要するに時間帯別の観光政策ですね。昼間の観光地のあり方、夜の観光政策というのを分ける。まあ時間のタイムセグメンテーションで、時間別の観光資源のあり方をお考えになれば、だいぶ私は変わっていきたくらうと思います。

同時にまた、夜に人がいなければ、それはお店だって開きませんから、なるべく、ここでみんなを泊めることです。大阪の人もそう簡単に帰らずに1泊ぐらい泊まっていてください、というようなことをすれば、随分違うと思いますので、そのようなところの施策が必要ではないかなと、そのような感じがいたしております。いず

れにしても、ご自分の身の回りを見回していただいて、地元の方々が観光客の目線に立って、私は「3S」というのですが、一つのシステム（system）化、観光資源のシステム化、もう一つは観光資源のシリーズ（series）化ですね。観光資源の観光支援をつないで、一連のものとしてつないで、ストーリー（story）です。この3Sをお考えになられて、たくさん潜在しているのですから、掘り起こしていただいて、さきほどお話がありましたように、そういうものを地元の方々がやはりあきらめずに掘り起こしていただく、それが夜をにぎやかにする第一歩ではないかこのように思います。ありがとうございました。

野口：どうもありがとうございました。

進行係が自分の意見を言うのはなるべく控えたいと思いますが、一つは夜の観光のための努力というのが、燈花会とか、なら燈花会という奈良公園をずっと燈籠をつないでいるのがあるんですね。須田先生の意見に付け加えさせていただいたら、せっかくそういうものをやっているのに、では、お店がその対応をしているか、あるいは飲食店がその対応をしているかいうところが次の問題として、今出てきているかと思います。

須田：一部奈良に夜いる人口、宿泊人口が増えれば今先生がおっしゃったようなことがあるのでしょうね。お互いに相乗効果が必要だと思います。

野口：それでは、順番を少し変えます。今のご回答に深く関連すると思いますので、村田先生、ご自分のご質問及び今のことについてお願いいたします。

村田：奈良の夜が楽しめない背景のひとつに、奈良県の人口1000人あたりの飲食店数が全国最下位ということがあります。奈良県民に外食という文化がないのです。奈良県民が外食するような文化づくりが先

なのです。奈良県民の方々はもっと外食してください。そうすることによって飲食店の数が増え、観光客もそのおこぼれにあずかれる仕組みを作らなければなりません。それから、山の辺の道が典型的ですが、地元の方は「あそこは観光客行くとこや。わしら行くとことちがう」と言われ、観光客には無関心です。観光客の方々は、桜井から柳本あたりまで歩くだけでヘトヘトになっており、休むところ、甘いものを食べる場所が欲しいのですが、山の辺の道には飲食店がありません。地元の方が全く気づかないことも問題です。

次に、「観光のターゲットをどうするのか」というご質問がございました。お手元の資料の8ページに、地域資源を生かす新観光・交流産業の開発・振興という項があります。ここに、グリーンツーリズムや工房ツーリズム、林業ツーリズムうんぬんと書いていますが、これは、すべてターゲットが違います。奈良全体としての観光のターゲットをどうこうするというより、奈良の資源をうまく再編集して、そこへ、例えば親子で夏休みの工作の宿題を作りに行けるような、新しい仕組みを作っていかなければならないと考えます。

3点目として、「NPOと行政が協働できていない。どうすれば良いのか」とのご質問がありました。私は、奈良県くらし創造部のNPO・ボランティアと行政との協働審査委員長でもあり、皆さんがお寄せくださる提案を審査させていただいています。NPO・ボランティア団体と県が協働する、県から活動助成金を提供させていただく協働事業は5年前から行っています。今年からは、企業さんからお金を頂いて、NPO・ボランティア団体に提供するための協働基金もつくられました。ただし、奈良県の財政規模は、4600億円程度しかありませんので、ほかの県と比べ、NPO・ボランティア団体と県との協働に充てられる金額が余りにも少な過ぎるという問題があります。財政の中でのウェイトをもうちょっと高めるように、

県民の方々から要望していただくことが必要です。それも含めて、行政に対して、どんどん提案してください。

4点目として、「行政スタッフの地域活動が少ない」とのご指摘がありました。これは、奈良県の決定的な弱みです。例えば神戸市であれば、地域団体と協働することが当たり前になっていますから、区役所の地域振興課のメンバーは、その区役所の管轄範囲内で行われているNPO・ボランティアの活動の内容を、そのNPO・ボランティア団体の理事長が紹介すると全く同じレベルで紹介できます。彼らは行政スタッフであるのみならず、一市民としてNPO・ボランティア団体に参加することも当たり前としています。そういう面では、奈良県内では、行政スタッフが、市町村スタッフも含めて、地域活動の現場へ出掛けるということが少ないように思います。この辺も奈良の将来ビジョンの中で提案をしています。

5点目に、「医療福祉分野が書かれてない」とのご指摘をいただきました。今年は、医療・福祉分野、教育に関しては取り組んでいません。来年、この両分野に取り組みます。さらにいくつもの分野が重なった複合領域にも取り組むつもりです。来年は、それらを含め、第2次提案として、総合的なビジョンをとりまとめたいと思っています。

最後に、「ネットワーク型シンクタンクへの参加の方法」をお問合わせいただきました。とてもありがたく思っています。シンクタンクメンバーに加わりたいという連絡を、[vision@nit-ass.jp](mailto:vision@nit-ass.jp) へ入れてください。お待ちしております。

野口：はい、どうもありがとうございました。

今のご質問の方以外でもこの活動に参加したいという方、ぜひご連絡をいただけたらと思います。いろいろな形で行政に対して外から文句を言うということよりも相談がありますという形での持ち掛



けをしていくことが必要だと思います。そのときも一人というのはしんどいですから、グループで議論してそれからある程度納得できるような内容にしてから持っていくということが大事だと私は思います。ところで、高野課長、先ほどの質問および地域振興の方向についてお願いします。

高野：先ほど、質問自体は4ついただいたと思います。今の話に一番絡んでくる行政と住民の関係というところですけども、野村先生もおっしゃったように、提案していただきたいというのもこれはもちろんそうですし、今、野口先生もおっしゃいましたけれども、そういう話をどんどんいただくというのは非常にありがたいことだと思っております。それはどんどん受けていきたいというように思っていますが、当然行政と住民の距離がまだ遠いというところはわれわれも反省しております、いろいろな活動しております。

一つは、知事とも直接住民で話し合う場を持つとうというのをやっております。それから、先ほど南部振興の計画、その推進のためには、この新組織をつくって、県下のどんだん地元に入って行って話をする、一緒に作り上げていくということを専門にやる職員というものを置こうと思っております。それから、もう一つは市町村、やはり住民と一番近い行政というのは市町村ですので、先ほど体制が弱いという話もありましたけれども、やはり市町村と話をして、住民の方々がどういうことを思っているのかということと一緒に考えていこうというように思っています。

それから、あと、それに関連してもう一つ質問がありました、都市部と農村部の連携にあたっては、県庁内で各部局どのように連携しているのかという話ですが、非常に行政的なご質問いただいたのですが、基本的に先ほど言いましたような地元の声というのを武器に、予告し、広い意味で調整していく人間が当然必要でしょう。そ

れは当然県の場合、トップは知事ですが、そういうことをできる人間を置くとともに、各部局の意識の改革ということが必要かなと。要は先ほども言いましたけども地域振興というのは県庁全体で行っているのだという意識を全員が持つということがまずは大事かなと思います。

それから、あと2つほどあります。南部とはどこかということですが、すけれども、よく私ももともと奈良の間人ではないのですけれども、やはり奈良の方にお聞きすると、南部というとはやはり今で言うと、五條市、それから吉野郡を指すというように感じられるようで、これを変えるというのは非常に難しいことだと私も思いました。ただ、この定義からすると、率直にお答えすると五條・吉野ということになるのですけれども、行政が何か計画を作るときには必ずこういう線を引きたがります。過疎でも法律に定められて、奈良県内に15になります市町村というのが、明確に市町村の行政エリアで決まります。

ただ、そういうことを意識されて南部というのは、皆さん気にされるのですけれども、今回ちょっと違った試みとして、先ほどの南部振興計画においては、別に南部というのは五條・吉野ですけれども、その周辺も含めて一体となって事業を興していくものについては、事業単位で入れていこうということも考えています。

それから、最後に、和歌山、三重との連携ということですが、確かにご質問いただいた方のおっしゃるとおりで、両脇に分かれます。三重というのがありまして、その辺の紀伊半島の真ん中の部分を振興するために、3県の知事が集まってどのような振興策を行っていくかというような会議を毎年1回持っております。それに基づき、もちろん県庁同士もですが、密接に情報交換しているということがあります。それと、もう一つは、これはイベント

的なものに近いのですけれども、吉野熊野国立公園とそのエリアの観光が一体として行っていこう、というような組織を立ち上げたりとか、そういった取り組みを行っています。

それから、どうも医療の関係だと奈良県の南部のほうだと和歌山県とか大阪府もそうですけれども、何かあったときにドクターヘリを飛ばしていただくとか、そういう連携なども行っているところです。

野口：はい、どうもありがとうございます。

他県との連携ということでは、本当は関西広域連合に対してどうすべきなのかという、非常に大事な論点かと思えます。ただ、行政の方、ちょっとこれはあえて伺いません。ほかの方どなたか広域連合についてご意見あれば少し教えてください。いかがでしょう。野村さんいかがですか。

野村：それはもうどんどんやっていけばいいと思います。

野口：はい、ありがとうございます。

では少し話を進めていきます。

野村さんにもいろいろな質問があったので、野村さんをお願いいたします。

野村：住民の方がたくさん参加されたのは、別に何も難しいことでもありません。ほとんどはシニアの女性の方です。女性の方というのは口コミがすごいので、楽しかったらお友達とか皆さん引っ張ってやりましょうよ、ということになるのですね。男性は能書きばかり言ってほとんど動きません。具体論では女性です。要は女性の力を利用するということです。

それから、もう一つは、いろいろな団体にも声掛けて参加してもらっているのですが、それはもう具体的に、例えば老人会だったらもち花を作って、皆さんそれをお客さんに売ってください。そして、

皆さんの活動資金にしてください。これだけを頼んで、そうすると老人会の方で町の全地域の老人会に呼びかけ参加されるとか。いろいろな団体とかグループとか参加されていますけど、一切会議はしません。みんな寄り集まって会議をすると、もう全然会議倒れになります。私は一切会議はしないです。具体的にこういうことで参加してくださいということで、一つひとつのグループとか団体に具体論をお願いします。

そのようなことで別に何の苦勞もなしにどんどんどんどん楽しいから、初め延べ420人だったのですけれども、今年で3988人と、来年はもっと増えると思います。要はわれわれ高齢者というのは何せ時間があるので楽しかったらどんどんどんどん参加されるということなので、それも特に女性の方です。男性はあまり期待しないでやっというほうがうまくいくと思います。

それから、これはちょっと質問とは関係ないのですが、一つここで披露しておきますと、日経新聞に先週載っていたのですが、シニアが自覚しなければいけないという記事が載っていましたのでちょっと紹介しますと、「何で引退した父のほうが稼ぎがいいのか。大手小売業に勤めるタカハシコウタさん（32）は釈然としない。コウタの年収は390万。退職し企業年金を含め540万の年金を受け取る父より少ない。就職氷河期の2001年に入社してから昇給はなく、賞与は減った。毎週末ゴルフに出掛ける父を見ると、僕らから税や保険料を取って父のような高齢者に配るのはおかしいと思う」、ということなのです。

だから、われわれの世代はゴルフや海外旅行に行っている場合ではないと思います。それぞれの地域でいろいろな問題があると思うので、その問題をわれわれシニアの世代がいろいろと自分のできる、自分の好きな分野でいいのですけれども問題を解決していくべきで

す。本当にこのままで、ゴルフや海外旅行やと、われわれシニア世代の人が浮かれていると、ある日に突然若者からしっぺ返しを食うと思いますので、ひとつそれをよく自覚をして、われわれの世代は地域のいろいろな問題に汗を流して知恵を絞って取り組んでいく必要があるのではないかと思います。

野口：どうもありがとうございました。会場の中にも今のお話に当てはまるような世代の方がたくさんおられると思いますので、ひとつよろしく願いいたします。

それでは、最後に藤井先生ですけれども、特に会場の方からの質問はありませんでしたが、私から質問します。大学としてやれる限りの大学の学部として活動しておられると思うのですが、後半でおっしゃっていたようないろいろな展開、採算を上げるための展開だとか、あるいは環境活動との連携とかということになってくると、とても大学だけでは無理だろう。つまり民間企業とか、あるいは地域の団体とかNPOとか、むしろそういうところの活動にシフトしていくという形。例えばその採算というときの事業規模ということを考えても、あるいは地域循環というときの規模ということを考えても必要になるだろうと思うのですが、その辺は先生は大学とそういう地域との関係をどのように考えておられますか。

藤井：もちろんそういうことはとても重要だと思います。大学は、どことも利害関係がないことが特徴ですから、そういう連携の核になりうると思います。ただ、継続性があるのか。基本的に大学は、教育研究機関ですから、地域のニーズより学生のニーズ、興味、関心が優先されます。その意味で、過度に大学の貢献活動に期待することには危うさを感じます。もちろんこれは教育機関に固有の問題というわけではなく、本業以外の部分に振り向ける経営的余力が不足している、あるいは興味・関心が薄れたなどの理由で活動を離れる企

業・団体・個人もおられますので、活動の継続性という部分に対する何らかの担保が必要ではないかと感じています。

野口：どうもありがとうございます。

現実に取り組んでおられることの問題点が本当にあるなと思います。

それでは、あと一巡だけしたいと思います。それ以上無理だと思います。

そこで、お一人1分から2分をお願いします。当面の課題は何かと、一番大事な課題は何かということ、それから、そのときにせっかくこのように大学学部主催のシンポジウムなので、大学にはどういうことを期待していくか、あるいは大学がどういうことをなすべきだということを一言おっしゃってもらえたらと思います。

今度は、では、野村さんから順番をお願いします。

野村：当面の課題というのですが、やはり何回も言うようですが、われわれシニア世代は本当にこの現状を、自分の置かれている立場を自覚するというのが一番大事ではないかと思っています。それから大学に求めるものですね。私は、奈良産業大学さんは、何も知らなかったのですが、「お金はないけれどもCGで高取城を作ってくれ。資料だけはある」と言っていったら、本当に大学とも何のつながりもない私ですけれども、ちゃんと受け入れてくれて1年半かかってできたということで、やはりいろいろな人たちに門戸を開いて、いろいろな地域の方と連携してやっていただければいいのではないかと思います。

野口：ありがとうございます。では、大学のことは村田先生お願いします。

村田：大学人があまりにも研究室に閉じこもり過ぎ、本からしか情報を得ていない状況が見られます。地域へ出かけて、地域や産業の問題点・課題と発展策を研究テーマにするということは義務づけられています。

せん。地域の人から「来てくれたら邪魔や」と言われるような大学人も多いと思われませんが、地域や産業とかかわる大学人を増やしていかなければ、大学自体が低迷していくのだらうと思っています。

野口：ありがとうございます。

ということで、私どもの大学は、今年の4月から「地域公共学総合研究所」というのがありまして、10人近いメンバーがそこに配属されております。若干ですけれど見ていますと、今まで書物の研究者から、この研究所に移られたということで、地域に出ていかれる方が何人か出ております。そういう意味では、研究所が少しずつスタート、動き始めたというようにやや我田引水的ですが、ご報告しておきます。

では、高野課長お願いします。

高野：一つ、当面の課題ということですが、行政としましたら、住民との意見交換をどのようにいつも行っていくのかと、それを今までの形だけではなくて、言葉の上面ではなくて、本当に効く事業というのは何なのかと、それを仕事でやっていくのかという仕組みづくりというところがやはり当面の課題ではないかと思っております。

それから、大学への期待についてですが、非常に私の感想ですが、奈良県では県立大学が、村田先生ところもそうですけれども、産業大学もそうですけれども、非常に地元に入っていて、一緒に振興策なりを考えてくださっています。引き続き、現場に出させていただいて、ご一緒に考えていただきたいということと、やはり住民と行政で、どうしても理論的なところが弱くなるので、それを持ち帰って、いかにそれが経済的にどう効果があるのかとか、そういう理論付けの部分というのはやはり中心になって考えていただくと非常に助かると思います。

以上です。

野口：はい、ありがとうございます。

では、藤井先生はいかがですか。

藤井：当面の課題は継続性という部分です。したがって大学に望むことは、責任を持って、なおかつじっくり腰を据えて地域とかかわっていてももらいたいということです。

野口：どうもありがとうございます。

それでは、最後に、須田さんお願いします。

須田：お願いがあるのですが、私は奈良県の方、奈良市の方々に特にお願いしたいのは人材の地産地消をやっていただきたい。ということ、大阪のベッドタウンから脱皮をしていただきたいということですね。ほとんどの方が奈良県の方々は、特に西部の地域や大阪に通っていらっしゃる方が非常に多い。そういう方々は、大阪で勤めて夜1杯飲んで帰ってきますから、奈良に帰ったらくたびれて寝られないわけですね。だから、さっきおっしゃったように奈良で何か会議しようとか、奈良で食事をしようとかっていう時間はないわけです。従って、何とか奈良にそういう方々が喜んで勤務するようなところをつくる。滋賀県が追い越したとおっしゃいましたが、滋賀県はものすごい勢いで企業誘致したのですね。従って、あそこに職場ができてから今逆ラッシュが起こっています。京都から滋賀県のほうに行くほうも朝はラッシュなのです、逆に。そういうようにしていけば、ここに皆が居着きます。定着されます。そこにお住みになったときに今度は住民として観光する心を持って、せっかく観光地に住んでいるんだからということで、皆さんがこの観光に取り組んでいただく、市民観光をやっていただく、こういうようなことが大事なわけです。地産地消をやっていただきたい。

大学につきましては、人材の育成を私はお願いしたいと思っています。観光は人なのです。さきほど野村さんのお話ありましたけ



れど、野村さんは私どもから言いましたら、仕掛け人です。こういう方がいらっしやる所といらっしやらない所では全然違います。そういう方々がもっともっとたくさん欲しいです。もっとも学校と大学側が仕掛け人をつくるわけにはいきません。仕掛け人というのは個性がないといけませんから、一律教育では駄目なのですが、その基本になるものをやはり何か大学で観光の理念とか、観光の考え方というものはやはり大学で基礎があったら、こういう仕掛け人はもっと私は発掘できると思いますので、ぜひそういうような人材の育成を特に大学にお願いしたいと思っております。と申しますのは、大学というのは営利を目的としておりませんから、民間でこれをやりますと、どうしてもそういう営利がからんでしまいますから、中正・公立な立場で人材の育成をしていただけるのでお願いしたいと思っております。私ども観光関係者はほとんど観光は独学でやっているのです。一遍も観光などの専門的な勉強をしたことはありません。書物もありませんでした。ぜひ、それをひとつお願いして人材の育成をしていただきたい。これを心から願います。

野口：どうもありがとうございました。

皆さん、本当に総括的にご提案いただいたと、特に、須田先生最後おまとめになったと思います。人材の地産地消という言葉、私は初めて聞きましたのですが、ぜひそういう奈良でありたいと思います。こういうところで、今日のシンポジウム、最後のパネルディスカッションを終わりたいと思います。

どうもご清聴をありがとうございました。

\*この原稿は、2010年12月18日、ならまちセンターにて行われたシンポジウムに加筆修正したものである。